選択本願念仏集　書下文

〈凡　例〉

（一）本訓読は、「土川本」（昭和十二年版・土川勧学宗学興隆会）を底本とし、「義山校訂本」（元禄九年刊・大正大学所蔵）等を参照した。

（二）漢字表記は、平易を旨とし可能なものは常用漢字に改めた。

（三）本訓読中、浄土三部経よりの引用は「仏のたまわく」とし、他の経論よりの引用は「仏いわく」とした。

新雕選択本願念仏集序

兵部卿三位平基親作云々

それ以れば、専称南謨の教門は、直至西刹の要路なり。ただ釈迦金口の宣のみにあらず。また弥陀素意の願たり。一日、三日執持名号の証、諸仏舌を舒ぶ。十声一声必得往生の義、吾等肝に銘ず。ここに空上人、一軸文集の書有り。選択本願念仏集と号す。秘密壇の行人は、即身の観を凝らす故にこれを閣くべし。大小乗の学者は、随心の法を愛する故にこれを握り難し。念仏の衆生においては、誰か帰せざらんや。ここに因って壁に埋むの誡めを知るといえども、また板に雕るの印を貽す。於戯、玄元聖祖の五千言、令尹早く上下の典を著わす。本願選択数十張、門徒、まさに摺写の益を得んとす。徳を思うの志、古今これ同じき者か。時に辛未の歳、建子の月、聊か意樹を勒して、遙かに来葉に伝うと云うのみ。

選択本願念仏集

南無阿弥陀仏　往生の業には念仏を先とす。

〔第一　聖道浄土二門篇〕

道綽禅師聖道浄土の二門を立てて、しかも聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文。

『安楽集』の上に云く、問うて曰く、一切衆生は皆仏性有り。遠劫より以来まさに多仏に値えるなるべし。何に因ってか今に至るまで、なお自ら生死に輪回して、火宅を出でざるや。答えて曰く、大乗の聖教に依るに、良に二種の勝法を得て、以て生死を排はざるに由る。ここを以て火宅を出でざるなり。何をか二と為す。一には謂く聖道、二には謂く往生浄土なり。その聖道の一種は、今の時証し難し。一には大

聖を去ること遥遠なるに由る。二には理は深く解は微なるに由る。この故に『大集月蔵経』に云く、「我が末法の時の中に、億億の衆生、行を起し道を修せんに、いまだ一人も得るもの有らじ」。当今は末法、現にこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみ有って通入すべき路なり。この故に『大経』に云わく、「もし衆生有って、たとい一生悪を造るとも、命終の時に臨んで、十念相続して、我が名字を称せんに、もし生ぜずば正覚を取らじ」と。またまた一切の衆生はすべて自ら量らず。もし大乗に據らば、真如実相第一義空、かつていまだ心を措かず、もし小乗を論ぜば、見諦修道に修入し、乃至那含羅漢に、五下を断じ五上を除くこと、道俗を問うこと無く、いまだその分有らず、たとい人天の果報有れども、皆五戒十善に為って、能くこの報を招く。然るに持ち得る者は、はなはだ希なり。もし起悪造罪を論ぜば、何ぞ暴風駛雨に異ならん。ここを以て諸仏の大慈、勧めて浄土に帰せしむ。たとい一形悪を造るともただ能く意を繫けて、専精に常に能く念仏すれば、一切の諸障、自然に消除して、定んで往生を得。何ぞ思量せずして、すべて去る心無きや。

私に云く、窃に計れば、それ立教の多少は宗に随って不同なり。且く有相宗のごときは、三時教を立てて一代の聖教を判ず。いわゆる有・空・中これなり。

無相宗のごときは、二蔵教を立てて以て一代の聖教を判ず。いわゆる菩薩蔵・声聞蔵これなり。華厳宗のごときは、五教を立てて一切の仏教を摂す。いわゆる小乗教・始教・終教・頓教・円教これなり。法華宗のごときは、四教五味を立てて以て一切の仏教を摂す。四教とはいわゆる蔵・通・別・円これなり。五味とはいわゆる乳・酪・生・熟・醍醐これなり。真言宗のごときは、二教を立てて一切を摂す。いわゆる顕教・密教これなり。今この浄土宗は、もし道綽禅師の意に依らば二門を立てて一切を摂す。いわゆる聖道門・浄土門これなり。問うて曰く、それ宗の名を立てることは本、華厳・天台等の八宗九宗に在り。いまだ浄土の家において、その宗の名を立てることを聞かず。然るに今、浄土宗と号すること何の証拠有るや。答えて曰く、浄土宗の名その証一に非ず。元暁の『遊心安楽道』に云く、「浄土宗の意は本、凡夫の為にし兼ねて聖人の為にす」と。また慈恩の『西方要決』に云く、「この一宗に依る」と。また迦才の『浄土論』に云く、「この一宗、窃かに要路たり」と。その証かくのごとし。疑端に足らず。ただし諸宗の立教は正しく今の意に非ず。且く浄土宗に就いて、略して二門を明さば、一には聖道門、二には浄土門なり。初めに聖道門とは、これに就いて二有り。一には大乗、二には小乗なり。大乗の中に就いて顕密権実等の不同有りとい

えども、今この『集』の意はただ顕大および権大を存す。故に歴劫迂回の行に当る。これに准じてこれを思うに、まさに密大および実大を存すべし。然ればすなわち今、真言・仏心・天台・華厳・三論・法相・地論・摂論これらの八家の意、正しくここに在り。まさに知るべし。次に小乗とは、すべてこれ小乗の経律論の中に明す所の声聞・縁覚・断惑証理入聖得果の道なり。上に准じてこれを思うに、また倶舎・成実・諸部の律宗を摂すべきのみ。およそこの聖道門の大意は、大乗および小乗を論ぜず、この娑婆世界の中において、四乗の道を修して、四乗の果を得るなり。四乗とは、三乗の外に仏乗を加う。

次に往生浄土門とは、これに就いて二有り。一には正に往生浄土を明すの教、二には傍に往生浄土を明すの教なり。初めに正に往生浄土を明すの教とは、謂く三経一論これなり。三経とは一には『無量寿経』、二には『観無量寿経』、三には『阿弥陀経』なり。一論とは天親の『往生論』これなり。あるいはこの三経を指して浄土の三部経と号す。

問うて曰く、三部経の名、またその例有りや。答えて曰く、三部経の名その例一に非ず。一には法華の三部、謂く『無量義経』・『法華経』・『普賢観経』これなり。二には大日の三部、謂く『大日経』・『金剛頂経』・『蘇悉地経』これなり。三

には鎮護国家の三部、謂く『法華経』・『仁王経』・『金光明経』これなり。四には弥勒の三部、謂く『上生経』・『下生経』・『成仏経』これなり。今はただこれ弥陀の三部なり。故に浄土の三部経と名づく。弥陀の三部とはこれ浄土正依の経なり。

次に傍に往生浄土を明すの教とは、『華厳』・『法華』・『随求』・『尊勝』等の、諸〳〵の往生浄土を明すの諸経これなり。また『起信論』・『宝性論』・『十住毘婆沙論』・『摂大乗論』等の、諸〳〵の往生浄土を明すの諸論これなり。

およそこの『集』の中に、聖道浄土の二門を立てる意は、聖道を捨てて、浄土門に入らしめんが為なり。これに就いて二の由有り。一には大聖を去ること遥遠なるに由る。二には理深く、解微なるに由る。この宗の中に二門を立てることは、独り道綽のみに非ず。曇鸞・天台・迦才・慈恩等の諸師、皆この意有り。且く、曇鸞法師の『往生論の註』に云く、「謹んで案ずるに、龍樹菩薩の『十住毘婆沙』に云く、菩薩阿毘跋致を求めるに、二種の道有り。一には難行道、二には易行道なり。難行道とは、謂く五濁の世、無仏の時において、阿毘跋致を求めるを難とす。この難にすなわち多途有り。ほぼ五三を言いて、以て義意を示さん。一には外道の相善、菩薩の法を乱る。二には声聞の自利、大慈悲を障

う。三には無顧の悪人、他の勝徳を破す。四には顚倒の善果、能く梵行を壊す。五にはただこれ自力にして他力の持無し。かくのごとき等の事、目に触れて皆、是なり。譬えば陸路の歩行はすなわち苦しきがごとし。易行道とは、謂くただ信仏の因縁を以て、浄土に生ぜんと願ずれば、仏の願力に乗じて、すなわち彼の清浄の土に往生することを得。仏力住持して、すなわち大乗正定の聚に入らしむ。正定はすなわちこれ阿毘跋致なり。譬えば水路の乗船はすなわち楽しきがごとし」。已上　この中の難行道とはすなわちこれ聖道門なり。易行道とは、すなわちこれ浄土門なり。難行・易行と、聖道・浄土と、その言は異なりといえども、その意これ同じ。天台・迦才これに同じ。まさに知るべし。また『西方要決』に云く、「仰ぎ惟れば、釈迦、運を啓いて、弘く有縁を益す。教、随方に闡けてならびに法潤に霑う。親り聖化に逢えるは、道、三乗を悟りき。福薄く、因疎なるは、勧めて浄土に帰せしむ。この業を作す者は、専ら弥陀を念じ、一切の善根、回して彼の国に生ず。弥陀の本願、誓って娑婆を度したまう。上現生の一形を尽し、下臨終の十念に至るまで、ともに能く決定して皆往生を得」。已上　また同じき後序に云く、「それ以れば、生れて像季に居して、聖を去ることこれ遥かなり。道、三乗に預かれども、契悟するに方無し。人天の両位は、躁動にし

て安からず。智博く、情弘きは、能く久しく処するに堪えたり。もし識癡に、行浅きは、恐らくは幽途に溺れん。必ずすべからく跡を娑婆に遠ざけ心を浄域に栖ましむべし」。已上　この中に三乗とはすなわちこれ聖道門の意なり。浄土とはすなわちこれ浄土門の意なり。三乗浄土と、聖道浄土とは、その名異なりといえども、その意また同じ。浄土宗の学者、まずすべからくこの旨を知るべし。たとい先に聖道門を学せる人といえども、もし浄土門において、その志有らば、すべからく聖道を棄てて、浄土に帰すべし。例せば彼の曇鸞法師は、四論の講説を捨てて、一向に浄土に帰し、道綽禅師は涅槃の広業を閣いて、偏に西方の行を弘めしがごとし。上古の賢哲なお以てかくのごとし。末代の愚魯、むしろこれに遵わざらんや。

問うて曰く、聖道家の諸宗、各〳〵師資相承有り。謂く、天台宗のごときは慧文・南岳・天台・章安・智威・慧威・玄朗・湛然、次第相承す。真言宗のごときは、大日如来・金剛薩埵・龍樹・龍智・金智・不空、次第相承す。自余の諸宗、また各〳〵相承の血脈有り。而るに今言う所の浄土宗に師資相承血脈の譜有りや。答えて曰く、聖道家の血脈のごとく、浄土宗にもまた血脈有り。ただし浄土一宗において、諸家また同じからず。いわゆる廬山の慧遠法師と、慈愍三蔵と、

道綽・善導等とこれなり。今且く道綽・善導の一家に依って、師資相承の血脈を論ぜば、これにまた両説有り。一には菩提流支三蔵・慧寵法師・道場法師・曇鸞法師・大海禅師・法上法師なり。已上『安楽集』に出づ。二には菩提流支三蔵・曇鸞法師・道綽禅師・善導禅師・懐感法師・少康法師なり。已上唐宋両伝に出づ。

〔第二　雑行を捨てて正行に帰する篇〕

善導和尚正雑二行を立てて、雑行を捨てて正行に帰するの文。

『観経の疏』の第四に云く、行に就いて信を立つとは、然るに行に二種有り。一には正行、二には雑行なり。正行と言うは専ら往生経に依って行を行ずる者、これを正行と名づく。何の者か是なる。一心に専らこの『観経』・『弥陀経』・『無量寿経』等を読誦し、一心に専注して、彼の国の二報荘厳を思想し観察し憶念し、もし礼するには、すなわち一心に専ら彼の仏を礼し、もし口称するには、すなわち一心に専ら彼の仏を称し、もし讃歎供養するには、すなわち一心に専ら讃歎供養す。これを名づけて

正とす。またこの正の中に就いてまた二種有り。一には一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に。もし礼誦等に依るをば、すなわち名づけて助業と為す。この正助二行を除いて已外の自余の諸善をことごとく雑行と名づく。もし前の正助二行を修すれば、心常に親近し憶念して断えざるを、名づけて無間とす。もし後の雑行を行ずれば、すなわち心常に間断す。回向して生ずることを得べしといえども、すべて疎雑の行と名づく。

私に云く、この文に就いて二の意有り。一には往生の行相を明し、二には二行の得失を判ず。

初めに往生の行相を明すとは、善導和尚の意に依るに往生の行多しといえども、大に分ちて二と為す。一には正行、二には雑行なり。初めに正行とは、これに付いて開合の二義有り。初めには開して五種とし、後には合して二種とす。初めの開して五種とすとは、一には読誦正行、二には観察正行、三には礼拝正行、四には称名正行、五には讃歎供養正行なり。第一に読誦正行とは専ら『観経』等を読誦する。すなわち文に、「一心に専らこの『観経』・『弥陀経』・『無量寿

経』等を読誦す」と云えるこれなり。第二に観察正行とは専ら彼の国の依正二報を観察する。すなわち文に、「一心に専注して彼の国の二報荘厳を思想し観察し憶念す」と云えるこれなり。第三に礼拝正行とは、専ら弥陀を礼する。すなわち文に、「もし礼するには、すなわち一心に専ら彼の仏を礼す」と云えるこれなり。第四に称名正行とは、専ら弥陀の名号を称する。すなわち文に、「もし口称するには、すなわち一心に専ら彼の仏を称す」と云えるこれなり。第五に讃歎供養正行とは、専ら弥陀を讃歎供養する。すなわち文に、「もし讃歎供養するには、すなわち一心に専ら讃歎供養す。これを名づけて正と為す」と云えるこれなり。もし讃歎と供養とを開して二と為せば、六種正行と名づくべし。今合の義に依るが故に五種と云う。次に合して二種とすとは、一には正業、二には助業なり。初めに正業とは、上の五種の中の第四の称名を以て正定の業とす。すなわち文に、「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」と云えるこれなり。次に助業とは、第四の口称を除いて外、読誦等の四種を以て助業とす。すなわち文に、「もし礼誦等に依らば、すなわち名づけて助業とす」と云えるこれなり。

問うて曰く、何が故ぞ、五種の中に独り称名念仏を以て、正定業と為するや。答えて曰く、彼の仏の願に順ずるが故に。意の云く、称名念仏は、これ彼の仏の本願の行なり。故にこれを修する者は、彼の仏の願に乗じて必ず往生することを得るなり。その仏の本願の義は、下に至って知るべし。次に雑行とは、すなわち文に、「この正助二行を除いて已外の自余の諸善をことごとく雑行と名づく」と云えるこれなり。意の云く、雑行無量なり。つぶさに述べるに遑あらず。ただし今且く五種の正行に飜対して、以て五種の雑行を明さん。一には読誦雑行、二には観察雑行、三には礼拝雑行、四には称名雑行、五には讃歎供養雑行なり。第一に読誦雑行とは、上の『観経』等の往生浄土の経を除いて已外の大小乗顕密の諸経において、受持し読誦するを、ことごとく読誦雑行と名づく。第二に観察雑行とは、上の極楽の依正を除いて已外の大小、顕密、事理の観行、皆ことごとく観察雑行と名づく。第三に礼拝雑行とは、上の弥陀を礼拝するを除いて已外の、一切の諸余の仏菩薩等、および諸〳〵の世天等において、礼拝恭敬するを、ことごとく礼拝雑行と名づく。第四に称名雑行とは、上の弥陀の名号を称するを除いて已外の自余の一切の仏菩薩等、および諸〳〵の世天等の名号を称するを、ことごとく称名雑行と名づく。第五に讃歎供養雑行とは、上の弥陀仏

を除いて已外の一切の諸余の仏菩薩等、および諸〳〵の世天等において、讃歎供養するを、ことごとく讃歎供養雑行と名づく。この外にまた布施・持戒等の無量の行有り。皆雑行の言に摂尽すべし。

次に二行の得失を判ぜば、「もし前の正助二行を修すれば、心常に親近し、憶念して断へざるを名づけて無間と為す。もし後の雑行を行ずれば、すなわち心常に間断す。回向して生ずることを得べしといえども、すべて疎雑の行と名づく」と、すなわちその文なり。この文の意を案ずるに、正雑二行に就いて、五番の相対有り。一には親疎対、二には近遠対、三には有間無間対、四には回向不回向対、五には純雑対なり。第一に親疎対とは、まず親とは正助二行を修する者は、阿弥陀仏においてはなはだ以て親昵とす。故に『疏』の上の文に云く、「衆生、行を起して、口常に仏を称すれば、仏すなわちこれを聞きたまう。身常に仏を礼敬すれば、仏すなわちこれを見たまう。心常に仏を念ずれば、仏すなわちこれを知りたまう。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまう。彼此の三業相い捨離せず。故に親縁と名づく」と。次に疎とは雑行なり。衆生仏を称せざれば、仏すなわちこれを聞きたまわず。身仏を礼せざれば、仏すなわちこれを見たまわず。心仏を念ぜざれば、仏すなわちこれを知りたまわず。衆生仏を憶念せざれば、

仏衆生を憶念したまわず。彼此の三業常に捨離す。故に疎行と名づく。第二に近遠対とは、まず近とは、正助二行を修する者は、阿弥陀仏においてはなはだ以て隣近とす。故に『疏』の上の文に云く、「衆生仏を見んと願わば、仏すなわち念に応じて、目の前に現在したまう。故に近縁と名づく」と。次に遠とは雑行。衆生仏を見んと願わざれば、仏すなわち念に応ぜず。目の前に現じたまわず、故に遠と名づく。ただし親近の義これ一なるに似たりといえども、善導の意分ちて二とす。その旨、『疏』の文に見えたり。故に今引釈する所なり。第三に無間有間対とは、まず無間とは、正助の二行を修する者は、弥陀仏において憶念間断せず。故に「名づけて無間とす」と云えるこれなり。次に有間とは、雑行を修する者は、弥陀仏において憶念常に間断す。故に「心常に間断す」と云えるこれなり。第四に不回向回向対とは、正助二行を修する者は、たとい別に回向を用いざれども、自然に往生の業と成る。故に『疏』の上の文に云く、「今この『観経』の中の十声称仏はすなわち十願十行有って具足す。云何が具足する。南無と言うはすなわちこれ帰命、またこれ発願回向の義なり。阿弥陀仏と言うはすなわちこれその行なり。この義を以て故に必ず往生することを得」。已上　次に回向とは、雑行を修する者は必ず回向を用うる時、往生の因と成る。もし回向を用いざる時は、往生の因と

成らず。故に「回向して、生ずることを得べし」といえどもと曰えるこれなり。第五に純雑対とは、まず純とは正助二行を修する者は、純らこれ極楽の行なり。次に雑とは、これ純ら極楽の行に非ず。人天および三乗に通じ、また十方の浄土に通ず。故に雑と云うなり。然れば西方の行者すべからく雑行を捨てて正行を修すべし。

問うて曰く、この純雑の義、経論の中において、その証拠有りや。答えて曰く、大小乗の経律論の中において、純雑の二門を立てること、その例一に非ず。大乗には、すなわち八蔵の中において、雑蔵を立つ。まさに知るべし。七蔵はこれ純、一蔵はこれ雑なり。小乗はすなわち四含の中において、雑含を立つ。まさに知るべし。三含はこれ純、一含はこれ雑なり。律にはすなわち二十犍度を立てて、以て戒行を明す。その中に前の十九はこれ純、後の一はこれ雑犍度なり。論にはすなわち八犍度を立てて、諸法の性相を明す。前の七犍度はこれ純、後の一はこれ雑犍度なり。『賢聖集』の中の唐宋両伝には、十科の法を立てて、高僧の行徳を明す。その中に前の九はこれ純、後の一はこれ雑科なり。乃至『大乗義章』に五聚法門有り。前の四聚はこれ純、後の一はこれ雑聚なり。また顕教のみに非ず、密教の中に純雑の法有り。謂く『山家の仏法血脈の譜』に云く、「一

には胎蔵界の曼陀羅血脈の譜一首、二には金剛界の曼陀羅血脈の譜一首、三には雑曼陀羅の血脈の譜一首、前の二首はこれ純、後の一首はこれ雑なり。純雑の義多しといえども、今略して小分を挙ぐるのみ。まさに知るべし。純雑の義、法に随って不定なり。これに因って今善導和尚の意、且く浄土の行において、純雑を論ずる。この純雑の義、内典のみにかぎらず。外典の中に、その例はなはだ多し。繁を恐れて出さず。ただし往生の行において、二行を分つこと善導一師に限らず。もし道綽禅師の意に依らば、往生の行多しといえども、束ねて二とす。一には謂く念仏往生、二には謂く万行往生。もし懐感禅師の意に依らば、往生の行多しといえども束ねて二とす。一には謂く念仏往生、二には謂く諸行往生なり。恵心これに同じ。かくのごときの三師各二行を立てて往生の行を摂すること、はなはだその旨を得たり。自余の諸師は然らず。行者まさにこれを思うべし。

『往生礼讃』に云く、もし能く上のごとく念念相続して、畢命を期とする者は、十はすなわち十生じ、百はすなわち百生ず。何を以ての故に。外の雑縁無く、正念を得るが故に。仏の本願と相応することを得るが故に。教に違わざるが故に。仏語に随順するが故なり。もし専を捨て、雑業を修せんと欲する者は、百時希に一二を得、千

時希に五三を得。何を以ての故に。すなわち雑縁乱動して、正念を失うに由るが故に。仏の本願と相応せざるが故に。教と相違するが故に。仏語に順ぜざるが故に。係念相続せざるが故に。憶想間断するが故に。回願慇重真実ならざるが故に。貪瞋諸見の煩悩、来って間断するが故に。慚愧懺悔の心有ること無きが故に。また相続して彼の仏恩を念報せざるが故に。心に軽慢を生じて、業行を作すといえども、常に名利と相応するが故に。人我自ら覆うて、同行善知識に親近せざるが故に。楽うて雑縁に近づいて、往生の正行を自障障他するが故なり。何を以ての故に。余このごろ自ら諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして専雑異なり有り。ただ意を専らにして、作さしめる者は、十はすなわち十生ず。雑を修して至心ならざる者は、千の中に一も無し。この二行の得失前にすでに弁ずるがごとし。仰ぎ願わくは一切の往生人等、善く自ら思量せよ。すでに能く今身に彼の国に生ぜんと願ずる者は、行住坐臥に必ずすべからく心を励まし己を剋めて、昼夜に廃すること莫く、畢命を期とすべし。上一形に在るは、少苦なるに似たれども、前念に命終して、後念にすなわち彼の国に生れて、長時永劫に常に無爲の法楽を受く。乃至成仏まで生死を経ず。あに快きに非ずや。まさに知るべし。

私に云く、この文を見るに、いよいよすべからく雑を捨てて専を修すべし。あに百即百生の専修正行を捨てて、堅く千中無一の雑修雑行を執せんや。行者能くこれを思量せよ。

〔第三　念仏往生本願篇〕

弥陀如来余行を以て往生の本願とせず、ただ念仏を以て往生の本願と為たまえるの文。

『無量寿経』の上に云わく、もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信楽して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覚を取らじ。

『観念法門』に上の文を引いて云く、もし我れ成仏せんに、十方の衆生、我が国に生ぜんと願じて、我が名字を称すること、下十声に至るまで、我が願力に乗じて、もし生ぜずば正覚を取らじ。

『往生礼讃』に同じく上の文を引いて云く、もし我れ成仏せんに、十方の衆生、我

が名号を称すること、下十声に至るまで、もし生ぜずば正覚を取らじ。彼の仏、今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし。本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生することを得。

私に云く、一切の諸仏各〳〵総別二種の願有り。総とは四弘誓願これなり。別とは釈迦の五百の大願、薬師の十二の上願等のごときこれなり。今この四十八願は、これ弥陀の別願なり。問うて曰く、弥陀如来、何れの時、何れの仏の所において、この願を発したまえるや。答えて曰く、『寿経』に云わく、「仏阿難に告げたまわく、乃往過去久遠無量不可思議無央数劫に錠光如来、世に興出して、無量の衆生を教化し度脱して、皆道を得せしめて、すなわち滅度を取りたまえり。次に如来有ます。名づけて光遠と曰う。乃至次を処世と名づく。かくのごときの諸仏五十三仏なり。皆ことごとくすでに過ぎたまえり。その時、次に仏有ます。世自在王如来と名づく。時に国王有り。仏の説法を聞いて、心に悦予を懐いて、ついで無上正真の道意を発し、国を棄て王を捐て、行じて沙門と作り、号して法蔵と曰う。高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如来の所に詣で乃至ここにおいて世自在王仏すなわち為に広く二百一十億の諸仏刹土の天人の善悪国土の粗妙を説

いて、その心願に応じて、ことごとく現じてこれを与えたまう。時に彼の比丘、仏の所説の厳浄の国土を聞き、皆ことごとく観見して、無上殊勝の願を超発す。その心寂静にして、志所著無く、一切世間に能く及ぶ者無し。五劫を具足して、荘厳仏国清浄の行を思惟し摂取す。阿難仏に白さく、彼の仏の国土の寿量幾何ぞや。仏の言わく、その仏の寿命四十二劫なり。時に法蔵比丘二百一十億の諸仏の妙土の清浄の行を摂取す」。已上

『大阿弥陀経』に云わく、「その仏すなわち二百一十億の仏国土の中の諸天人民の善悪国土の好醜を選択し、為に心中所欲の願を選択す。樓夷亙羅仏ここに世自在王仏と云う。経を説き畢って曇摩迦ここに法蔵と云う。すなわちその心を一にして、すなわち天眼を得、徹視してことごとく自ら二百一十億の諸仏の国土の中の諸天人民の善悪国土の好醜を見て、すなわち心中の所願を選択して、すなわちこの二十四願の経を結得す」。『平等覚経』また　この中の選択とは、すなわちこれ取捨の義なり。謂く、二百一十億の諸仏の浄土の中において、人天の悪を捨てて、人天の善を取り、国土の醜を捨てて、国土の好を取るなり。『大阿弥陀経』の選択の義かくのごとし。『双巻経』の意また選択の義有り。謂く、二百一十億の諸仏の妙土の清浄の行を摂取すと云えるこれなり。選択と摂取とその言は異なりと

いえども、その意これ同じ。然れば不清浄の行を捨てて、清浄の行を取るなり。上の天人の善悪、国土の粗妙その義また然なり。これに准じてまさに知るべし。それ四十八願に約して、一往各〳〵選択摂取の義を論ぜば、第一に無三悪趣の願とは、覩見する所の二百一十億の土の中において、あるいは三悪趣有るの国土有り、あるいは三悪趣無きの国土有り。すなわち、その三悪趣有る粗悪の国土を選捨して、その三悪趣無き善妙の国土を選取するが故に選択と云うなり。第二に不更悪趣の願とは、彼の諸仏の土の中において、あるいはたとい国の中に三悪道無しといえども、その国の人天寿終の後、その国より去って、また三悪趣に更るの土有り。あるいは悪道に更らざるの土有り。すなわちその悪道に更る粗悪の国土を選捨して、その悪道に更らざる善妙の国土を選取するが故に選択と云うなり。第三に悉皆金色の願とは、彼の諸〳〵の仏の土の中において、あるいは一土の中に黄白一類の人天有るの国土有り。あるいは純黄金色の国土有り。すなわち黄白二類の粗悪の国土を選捨して、黄金一色の善妙の国土を選取するが故に選択と云うなり。第四に無有好醜の願とは、彼の諸仏の土の中において、あるいは人天の形色好醜不同の国土有り。あるいは形色一類にして好醜有ること無きの国土有り。すなわち好醜不同の粗悪の国土を選捨して、好醜有ること無き善妙の国

土を選取するが故に選択と云うなり。乃至第十八の念仏往生の願とは、彼の諸仏の土の中において、あるいは布施を以て往生の行とするの土有り。あるいは持戒を以て往生の行とするの土有り。あるいは忍辱を以て往生の行とするの土有り。あるいは精進を以て往生の行とするの土有り。あるいは禅定を以て往生の行とするの土有り。あるいは般若を以て第一義を信ずる等これなり。往生の行とするの土有り。あるいは菩提心を以て往生の行とするの土有り。あるいは六念を以て往生の行とするの土有り。あるいは持経を以て往生の行とするの土有り。あるいは持呪を以て往生の行とするの土有り。あるいは起立塔像、飯食沙門および孝養父母、奉事師長等の種種の行を以て、各〳〵往生の行とするの国土等有り。あるいは専らその国の仏名を称して往生の行とするの土有り。かくのごとく一行を以て一仏の土に配することは、これ且く一往の義なり。再往これを論ぜばその義不定なり。あるいは一仏の土の中に、多行を以て往生の行とするの土有り。あるいは多仏の土の中に、一行を以て通じて往生の行とするの土有り。かくのごとく往生の行種種不同なり。つぶさに述ぶべからず。すなわち今は前の布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選捨して専称仏号を選取す。故に選択と云うなり。且く五の願に約して、略して選択を論ずることその義かくのごとし。自余の諸願はこれに准じてまさに知るべし。

問うて曰く、普く諸願に約するに粗悪を選捨し善妙を選取すること、その理然るべし。何が故ぞ第十八の願に一切の諸行を選捨し、ただ偏に念仏の一行を選取して往生の本願とするや。答えて曰く、聖意測り難し、輙く解すること能はず。然りといえども、今試みに二義を以てこれを解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。初めに勝劣とは念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。所以は何となれば、名号はこれ万徳の帰する所なり。然ればすなわち弥陀一仏の所有る四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功徳、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功徳、皆ことごとく阿弥陀仏の名号の中に摂在せり。故に名号の功徳最も勝とす。余行は然らず、各一隅を守る。ここを以て劣とす。譬へば世間の屋舎のごとし。その屋舎の名字の中には棟梁 椽柱等の一切の家具を摂すれども、棟梁等の一一の名字の中には一切を摂すること能はず。これを以てまさに知るべし。然ればすなわち仏の名号の功徳は余の一切の功徳に勝れたり。故に劣を捨て勝を取って、以て本願としたまうか。次に難易の義とは念仏は修し易く、諸行は修し難し。この故に『往生礼讃』に云く、「問うて曰く、何が故ぞ観を作さしめずして、ただちに専ら名字を称せしむるは何の意有るや。答えて曰く、すなわち衆生障り重く、境細かく、心粗く、識颺り、神飛びて観成就し難きに由っ

てなり。ここを以て大聖悲憐して、ただちに勧めて専ら名字を称せしむ。正しく称名の易きが故に相続してすなわち生ずるに由る」。已上

また『往生要集』に「問うて曰く、一切の善業各〳〵利益有って、各〳〵往生を得。何が故ぞただ念仏の一門を勧むるや。答えて曰く、今念仏を勧めることは、これ余の種種の妙行を遮するには非ず。ただこれ男女貴賤行往坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜず、これを修するに難からず。乃至、臨終に往生を願求するに、その便宜を得ること念仏に如かず」。已上　故に知んぬ、念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然ればすなわち、一切衆生をして平等に往生せしめんが為に、難を捨て易を取って本願としたまえるか。もしそれ造像起塔を以て、本願としたまわば、貧窮困乏の類は定んで往生の望を絶たん。然るに富貴の者は少なく、貧賤の者ははなはだ多し。もし智慧高才を以て本願としたまわば、愚鈍下智の者は定んで往生の望を絶たん。然るに智慧ある者は少なく、愚癡なる者ははなはだ多し。もし多聞多見を以て本願としたまわば、少聞少見の輩は定んで往生の望を絶たん。然るに多聞の者は少なく、少聞の者ははなはだ多し。もし持戒持律を以て本願としたまわば、破戒無戒の人は定んで往生の望を絶たん。然るに持戒の者は少なく、破戒の者ははなはだ多し。自余の諸行これに准

じてまさに知るべし。まさに知るべし、上の諸行等を以て本願としたまわば、往生を得る者は少なく、往生せざる者は多からん。然ればすなわち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催され、普く一切を摂せんが為に、造像起塔等の諸行を以て、往生の本願としたまわず、ただ称名念仏の一行を以て、その本願としたまえる。故に法照禅師の『五会法事讃』に云く、「彼の仏の因中に弘誓を立つ。名を聞いて我れを念ぜばすべて迎来せん。貧窮と富貴とを簡ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞と浄戒を持つとを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばず、ただ心を回して多く念仏せしむれば、能く瓦礫をして変じて金と成さしむ」。已上

問うて曰く、一切の菩薩はその願を立つといえども、あるいはすでに成就せる有り、またいまだ成就せざる有り。未審し、法蔵菩薩の四十八願はすでに成就したまうとやせん、はたいまだ成就したまわずとやせん。答えて曰く、法蔵の誓願一一に成就したまえり。何となれば、極楽界の中にすでに三悪趣無し。まさに知るべし。これすなわち無三悪趣の願を成就するなり。何を以てか知ることを得たる。すなわち願成就の文にまた地獄、餓鬼、畜生諸難の趣無しと云えるこれなり。また彼の国の人天寿終って後、三悪趣に更ること無し。まさに知るべし、これすなわち不更悪趣の願を成就するなり。何を以てか知ることを得たる。す

なわち願成就の文に、また彼の菩薩乃至成仏まで悪趣に更らずと云えるこれなり。また極楽の人天すでに以て一人として三十二相を具せざること有ること無し。まさに知るべし、これすなわち具三十二相の願を成就するなり。何を以てか知ることを得たる。すなわち願成就の文に、彼の国に生るる者は皆ことごとく三十二相を具足すと云えるこれなり。かくのごとく初め無三悪趣の願より終り得三法忍の願に至るまで、一一の誓願皆以て成就せり。第十八の念仏往生の願、あに孤り以て成就したまわざらんや。然ればすなわち念仏の人皆以て往生す。何を以てか知ることを得たる。すなわち念仏往生の願成就の文に、諸有る衆生その名号を聞いて信心歓喜して、乃至一念至心に回向して、彼の国に生ぜんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住すと云えるこれなり。およそ四十八願、浄土を荘厳す。華池宝閣、願力に非ずということ無し。何ぞその中において独り念仏往生の願を疑惑すべきや。加之、一一の願の終りに、もし爾らずば正覚を取らじと云えり。而るに阿弥陀仏成仏したまいてより已来、今において十劫なり。成仏の誓いすでに以て成就せり。まさに知るべし、一一の願虚しく設くべからず。故に善導の云く、「彼の仏今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし、

本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生を得」。巳上

問うて曰く、『経』に十念と云い『釈』に十声と云う。念声の義云何。答えて曰く、念声はこれ一なり。何を以てか知ることを得たる。『観経』の下品下生に云わく、「声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するが故に念念の中において八十億劫の生死の罪を除く」と。今この文に依るに、声はこれ念なり、念はすなわちこれ声なること、その意明らけし。加之、『大集月蔵経』に云く、「大念は大仏を見、小念は小仏を見る」と。感師釈して云く、「大念とは大声の念仏、小念とは小声の念仏なり」と。故に知んぬ、念はすなわちこれ唱なり。

問うて曰く、『経』に乃至と云い、『釈』に下至と云う。その意云何。答えて曰く、乃至と下至とその意これ一なり。『経』に乃至と云えるは、多より少に向かうの言なり。多とは上一形を尽す。少とは下十声一声等に至るなり。『釈』に下至と云えるは、下とは上に対するの言なり。下とは下十声一声等に至るなり。上とは上一形を尽す。上下相対の文、その例これ多し。宿命通の願に云わく、「もし我れ仏を得たらんに、国中の人天宿命を識らずして、下百千億那由他諸劫の

事を知らざるに至らば、正覚を取らじ」と。かくのごとく五神通および光明寿命等の願の中に、一一に下至の言を置く。これすなわち多より少に至り、下を以て上に対するの義なり。上の八種の願に例するに、今この願の乃至とは、すなわちこれ下至なり。この故に今善導の引釈する所の下至の言、その意相違せず。ただし善導と諸師とその意不同なり。諸師の釈には別して十念往生の願と云う。善導独り総じて念仏往生の願と云えり。諸師の別して十念往生の願と云えるは、その意すなわち周からず。然る所以は、上一形を捨て、下一念を捨つるが故。善導の総じて念仏往生の願と言えるは、その意すなわち周し。然る所以は、上一形を取り、下一念を取るが故。

〔第四　三輩念仏往生篇〕

三輩念仏往生の文

仏、阿難に告げたまわく、十方世界の諸天人民、それ至心有って彼の国に生ぜんと

願ずるに、およそ三輩有り。その上輩とは、家を捨て欲を棄てしかも沙門と作り、菩提心を発して、一向に専ら無量寿仏を念じ、諸〻の功徳を修して彼の国に生ぜんと願ず。これ等の衆生寿終の時に臨んで、無量寿仏、諸〻の大衆とともに、その人の前に現ず。すなわち彼の仏に随ってその国に往生し、すなわち七宝華の中において自然に化生して不退転に住す。智慧勇猛、神通自在なり。この故に阿難、それ衆生有って、今世において無量寿仏を見たてまつらんと欲せば、まさに無上菩提の心を発し、功徳を修行し、彼の国に生ぜんと願ずべし。

仏、阿難に語げたまわく、その中輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心有って、彼の国に生ぜんと願ずるに、行じて沙門と作り、大いに功徳を修すること能わずといえども、まさに無上菩提の心を発して、一向に専ら無量寿仏を念ずべし。多少に善を修し、斎戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繒を懸け、燈を燃し、華を散らし、香を焼き、これを以て回向して彼の国に生ぜんと願ず。その人終りに臨んで、無量寿仏その身を化現したまう。光明相好、つぶさに真仏のごとし。諸〻の大衆とともに、その人の前に現ず。すなわち化仏に随ってその国に往生して、不退転に住す。功徳智慧ついで上輩の者のごとし。

仏、阿難に告げたまわく、その下輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心有って、

彼の国に生ぜんと欲せんに、たとい諸〳〵の功徳を作すこと能わざるも、まさに無上菩提の心を発して、一向に意を専らにして、乃至十念、無量寿仏を念じて、その国に生ぜんと願ずべし。もし深法を聞いて歓喜信楽して疑惑を生ぜず、乃至一念彼の仏を念じ、至誠心を以て、その国に生ぜんと願ぜば、この人終りに臨んで、夢に彼の仏を見たてまつりて、また往生を得。功徳智慧、ついで中輩の者のごとし。

私に問うて曰く、上輩の文の中に、念仏の外にまた捨家棄欲等の余行有り。中輩の文の中に、また起立塔像等の余行有り。下輩の文の中に、また菩提心等の余行有り。何が故ぞただ念仏往生と云うや。答えて曰く、善導和尚の『観念法門』に云く、「またこの『経』の下巻の初めに云く、仏説きたまうに、一切衆生の根性は不同にして上中下有り。その根性に随って、仏皆勧めて専ら無量寿仏の名を念ぜしむ。その人命終らんと欲する時、仏聖衆とともに自ら来って迎接してことごとく往生を得せしめたまう」と。この釈の意に依るに、三輩ともに念仏往生と云うなり。問うて曰く、この釈いまだ前の難を遮せず。何ぞ余行を棄てて、ただ念仏と云うや。答えて曰く、これに三の意有り。一には諸行を廃して、念仏に帰せしめんが為に、諸行を説く。二には念仏を助成せしめんが為に、諸行を説く。三には念仏と諸行との二門に約して各〳〵三品を立てんが為に、諸行

を説く。一に諸行を廃して念仏に帰せしめんが為に、諸行を説くとは、善導の『観経の疏』の中に、「上来定散両門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば、意衆生をして、一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り」と云う釈の意に准じて、且くこれを解せば、上輩の中に、菩提心等の余行を説くといえども、上の本願に望むれば、意ただ衆生をして専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り。而るに本願の中には、更に余行無し。三輩ともに上の本願に依るが故に一向専念無量寿仏と云う。一向とは、二向三向等に対する言なり。例せば、彼の五竺に三寺有るがごとし。一には一向大乗寺、この寺の中には小乗を学すること無し。二には一向小乗寺、この寺の中には大乗を学すること無し。三には大小兼行寺、この寺の中には大小兼ね学す。故に兼行寺と云う。まさに知るべし。大小の両寺には一向の言有り。兼行の寺には一向の言無し。今この『経』の中の一向もまた然なり。もし念仏の外にまた余行を加えばすなわち一向に非ず。もし寺に准ぜば、兼行と云うべし。すでに一向と云う、余を兼ねざること明らけし。すでに先に余行を説くといえども、後に一向専念と云う。明らかに知んぬ、諸行を廃してただ念仏を用いるが故に一向と云う。もし爾らずば一向の言、最も以て消し匝きか。二には念仏を助成せしめんが為に、この諸行を説くとは、これにまた二の意有

り。一には同類の善根を以て念仏を助成し、二には異類の善根を以て念仏を助成す。初めに同類の助成とは、善導和尚の『観経の疏』の中に、五種の助行を挙げて念仏の一行を助成すこれなり。つぶさには上の正雑二行の中に説くがごとし。次に異類の助成とは、まず上輩に就いて正助を論ぜば、一向専念無量寿仏とはこれ正行なり。またこれ所助なり。捨家棄欲、而作沙門、発菩提心等とは、これ助行なり。またこれ能助なり。謂く往生の業には、念仏を本とす。故に一向に念仏を修せんが為に、家を捨て欲を棄て沙門と作り、また菩提心を発す等なり。中に就いて出家発心等とは、且く初出および初発を指す。念仏はこれ長時不退の行なり。むしろ念仏を妨礙すべけんや。中輩の中に、また起立塔像、懸繒、燃燈、散華、焼香等の諸行有り。これすなわち念仏の助成なり。その旨『往生要集』に見えたり。謂く助念方法の中の、方処供具等これなり。下輩の中に、また発心有り、また念仏有り。助正の義、前に准じて知るべし。三に念仏諸行に約して、各〈三品を立てんが為に、諸行を説くとは、まず念仏に約して三品を立つとは、謂くこの三輩の中に、通じて皆一向専念無量寿仏と云う。これすなわち念仏門に約して、その三品を立つるなり。故に『往生要集』の念仏証拠門に云く、「『双巻経』の三輩の業、浅深有りといえども、しかも通じて皆一向専念無量寿仏と云

う」。感師これに同じ。次に諸行門に約して、三品を立つとは、謂くこの三輩の中に、通じて皆菩提心等の諸行有り。これすなわち諸行に約して、その三品を立つるなり。故に『往生要集』の諸行往生門に云く、「『双巻経』の三輩も、またこれを出でず」。已上

およそかくのごときの三義、不同有りといえども、ともにこれ一向念仏の為にする所以なり。初めの義は、すなわちこれ廃立の為に説く。謂く諸行は廃の為に説き、念仏は立の為に説く。次の義は、すなわちこれ助正の為に説く。謂く念仏の正業を助けんが為に諸行の助業を説く。後の義は、すなわちこれ傍正の為に説く。謂く、念仏諸行の二門を説くといえども、念仏を以て正と為し、諸行を以て傍と為す。故に三輩通じて皆念仏と云うなり。ただしこれ等の三義、殿最知り難し。請う、諸〻の学者、取捨心に在るべし。今もし善導に依らば、初めを以て正と為すのみ。

問うて曰く、三輩の業皆念仏と云う。その義然るべし。ただし『観経』の九品と、『寿経』の三輩とは、本これ開合の異なり。もし爾らば何ぞ『寿経』の三輩の中には皆念仏と云い、『観経』の九品に至って上中二品に念仏を説かず、下品に

至って始めて念仏を説くや。答えて曰く、これに二の義有り。一には問端に云うがごとく、『双巻』の三輩と『観経』の九品と開合の異とは、これを以てまさに知るべし。九品の中に、皆念仏有るべし。云何が知ることを得たる。三輩の中に皆念仏有り。九品の中、盍ぞ念仏無からんや。故に『往生要集』に云く、「問う、念仏の行は、九品の中において、これ何れの品の摂ぞや。答う、もし説のごとく行ぜば、理、上上に当れり。かくのごとくその勝劣に随ってまさに九品を分つべし。然るに『経』の説く所の九品の行業は、これ一端を示す。理、実には無量なり」と。已上

故に知んぬ、念仏また九品に通ずべし。二には『観経』の意、初めには広く定散の行を説いて普く衆機に逗し、後には定散二善を廃して、念仏の一行に帰せしむ。いわゆる「汝好持是語」等の文これなり、その義下につぶさに述べるがごとし。故に知んぬ、九品の行は、ただ念仏に在ることを。

〔第五　念仏利益篇〕

念仏利益の文

『無量寿経』の下に云わく、仏、弥勒に語げたまわく、それ彼の仏の名号を聞くことを得ること有って、歓喜踊躍して乃至一念せん。まさに知るべし、この人は大利を得と為す。すなわちこれ無上の功徳を具足す。

善導の『礼讃』に云く、それ彼の弥陀仏の名号を聞くことを得ること有って、歓喜して一念に至るまで、皆かしこに生ずることを得べし。

私に問うて曰く、上の三輩の文に准ずるに、念仏の外に菩提心等の功徳を挙ぐ。何ぞ彼等の功徳を歎ぜずして、ただ独り念仏の功徳を讃ずるや。答えて曰く、聖意測り難し。定んで深意有らん。且く善導の一意に依ってこれを謂わば、原ぬるにそれ仏意は、正直にただ念仏の行を説かんと欲すといえども、機に随って、一往、菩提心等の諸行を説いて、三輩の浅深不同を分別す。然るに今諸行においては、すでに捨てて歎ぜず、置いて論ずべからざる者なり。ただ念仏の一行に就いて、すでに選んで讃歎したまう。思って分別すべき者なり。もし念仏に約して、三輩を分別せば、これに二の意有り。一には観念の浅深に随ってこれを分別し、

二には念仏の多少を以てこれを分別す。浅深とは、上に引く所のごとし。もし説のごとく行ぜば、理、上上に当るというこれなり。次に多少とは、下輩の文の中に、すでに十念乃至一念の数有り。上中の両輩、これに准じて随って増すべし。『観念法門』に云く、「日別に一万遍仏を念じ、またすべからく時に依って、浄土の荘厳事を礼讃すべし。大いに精進すべし。あるいは三万六万十万を得る者は、皆これ上品上生の人なり」と。まさに知るべし。三万已上はこれ上品上生の業、三万已去は上品已下の業なり。すでに念数の多少に随って、品位を分別することこれ明らけし。今ここに一念と言うは、これ上の念仏の願成就の中に言う所の一念と、下輩の中に明す所の一念とを指す。願成就の文の中に、一念と云うといえども、いまだ功徳の大利を説かず。また下輩の文の中に、一念と云うといえども、また功徳の大利を説かず。この一念に至って、説いて大利と為し、歎じて無上と為す。まさに知るべし、これ上の一念を指すなり。この大利とは、これ小利に対するの言なり。然ればすなわち菩提心等の諸行を以て小利と為し、乃至一念を以て大利と為す。また無上功徳とは、これ有上に対する言なり。余行を以て有上と為し、念仏を以て無上と為す。すでに一念を以て一の無上と為す。まさに知るべし。十念を以て十の無上と為し、また百念を以て百の無上と為し、

また千念を以て千の無上と為す。かくのごとく展転して、少より多に至り、念仏恒沙ならば、無上の功徳もまた恒沙なるべし。かくのごとくまさに知るべし。然れば諸〳〵の往生を願求せん人、何ぞ無上大利の念仏を廃して、強いて有上小利の余行を修せんや。

〔第六　末法万年に特り念仏を留むる篇〕

末法万年の後に余行ことごとく滅し、特り念仏を留むるの文。

『無量寿経』の下巻に云わく、当来の世に経道滅尽せんに、我れ慈悲哀愍を以て、特りこの『経』を留めて、止住すること百歳ならん。それ衆生有って、この『経』に値わん者は、意の所願に随って、皆得度すべし。

私に問うて曰く、『経』にただ「特留此経止住百歳」と云って、全くいまだ「特留念仏止住百歳」と云わず。然るに今何ぞ特留念仏と云うや。答えて曰く、

この『経』の所詮は全く念仏に在り。その旨前に見えたり。再び出だす能わず。善導・懐感・恵心等の意も、またまたかくのごとし。然ればすなわちこの『経』の止住は、すなわち念仏の止住なり。然る所以は、この『経』に菩提心の言有りといえども、いまだ菩提心の行相を説かず。また持戒の言有りといえども、いまだ持戒の行相を説かず。而るに菩提心の行相を説くことは、広く『菩提心経』等に在り。彼の『経』先に滅しなば菩提心の行、何に因ってかこれを修せん。また持戒の行相を説くことは、広く大小の戒律に在り。彼の戒律先に滅しなば、持戒の行、何に因ってかこれを修せん。自余の諸行これに准じてまさに知るべし。故に善導和尚の『往生礼讃』にこの文を釈して云く、「万年に三宝滅せんに、この『経』、住すること百年ならん。その時聞いて一念せば、皆まさにかしこに生ずることを得べし」。またこの文を釈するに、略して四の意有り。一には聖道浄土二教住滅の前後。二には十方西方二教住滅の前後。三には兜率西方二教住滅の前後。四には念仏諸行二行住滅の前後なり。一に聖道浄土二教住滅の前後とは、謂く聖道門の諸経は先に滅す、故に「経道滅尽」と云う。浄土門のこの『経』特り留まる。故に「止住百歳」と云う。まさに知るべし、聖道は機縁浅薄にして、浄土は機縁深厚なり。二に十方西方二教住滅の前後とは、謂く

十方浄土往生の諸教、先に滅す。故に「経道滅尽」と云う。西方浄土往生のこの『経』特り留まる。故に「止住百歳」と云う。まさに知るべし、十方の浄土は機縁浅薄にして、西方浄土は機縁深厚なり。三に兜率西方二教住滅の前後とは、謂く『上生』、『心地』等の上生兜率の諸教、先に滅す。故に「経道滅尽」と云う。往生西方のこの『経』特り留まる。故に「止住百歳」と云う。まさに知るべし、兜率は近しといえども縁浅く、極楽は遠しといえども縁深し。四に念仏諸行二行住滅の前後とは、諸行往生の諸教、先に滅す。故に「経道滅尽」と云う。念仏往生のこの『経』特り留まる。故に「止住百歳」と云う。まさに知るべし、諸行往生は、機縁最も浅く、念仏往生は、機縁はなはだ深し。加之、諸行往生は縁少く、念仏往生は縁多し。また諸行往生は、近く末法万年の時に局れり。念仏往生は、遠く法滅百歳の代を霑す。問うて曰く、すでに「我れ慈悲哀愍を以て、特りこの『経』を留めて、止住すること百歳ならん」と云う。もし爾らば釈尊慈悲を以て、経教を留めたまわば、何れの経、何れの教か留まらざらん。而るに何ぞ余経を留めずして、ただこの『経』を留めたまうや。答えて曰く、たとい何れの経を留むといえども、別して一経を指せば、またこの難を避けず。ただし特りこの『経』を留める、その深意有るか。もし善導和尚の意に依ら

ば、この『経』の中に、すでに弥陀如来の念仏往生の本願を説けり。釈迦の慈悲、念仏を留めんが為に、殊にこの『経』を留む。余経の中には、いまだ弥陀如来の念仏往生の本願を説かず。故に釈尊の慈悲、以てこれを留めたまわず。およそ四十八願、皆本願なりといえども、殊に念仏を以て、往生の規と為す。故に善導の『釈』に云く、「弘誓多門にして四十八なれども、偏に念仏を標して、最も親しとす。人能く仏を念ずれば、仏また念じたまう。専心に仏を想えば、仏人を知りたまう」。已上

故に知んぬ。四十八願の中に、すでに念仏往生の願を以て、本願の中の王と為す。ここを以て釈迦の慈悲、特りこの『経』を以て、止住すること百歳なり。例せば彼の『観無量寿経』の中に、定散の行を付属せずして、ただ孤り念仏の行を付属するがごとし。これすなわち彼の仏願に順ずるが故に、念仏の一行を付属するなり。問うて曰く、百歳の間、念仏を留むべきこと、その理然るべし。この念仏の行は、ただ彼の時機に被るとやせん。はた正像末の機に通ずとやせん。答えて曰く、広く正像末法に通ずべし。後を挙げて今を勧む。その義まさに知るべし。

〔第七　光明ただ念仏の行者を摂する篇〕

弥陀の光明余行の者を照さず、ただ念仏の行者を摂取したまうの文。

『観無量寿経』に云わく、無量寿仏に八万四千の相有り。一一の相に、各〈八万四千の随形好有り。一一の好に、また八万四千の光明有り。一一の光明、遍く十方の世界を照して、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず。

同経の『疏』に云く、「無量寿仏」より、下「摂取不捨」に至る已来は、正しく身の別相を観ずるに、光有縁を益することを明す。すなわちその五有り。一には相の多少を明し、二には好の多少を明し、三には光の多少を明し、四には光照の遠近を明し、五には光の及ぶ所の処、偏に摂益を蒙ることを明す。

問うて曰く、つぶさに衆行を修して、ただ能く回向すれば、皆往生を得。何を以てか、仏光普く照らすにただ念仏の者のみを摂する、何に意有るや。答えて曰く、これに三義有り。一に親縁を明す。衆生、行を起して口常に仏を称すれば、仏すなわちこ

れを聞きたまう。身常に仏を礼敬すれば、仏すなわちこれを見たまう。心常に仏を念ずれば、仏すなわちこれを知りたまう。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまう。彼此の三業相い捨離せず。故に親縁と名づく。二に近縁を明す。衆生仏を見んと願ずれば、仏すなわち念に応じて目前に現在す。故に近縁と名づく。三に増上縁を明す。衆生称念すれば、すなわち多劫の罪を除く、命終らんと欲する時、仏聖衆とともに自ら来って迎接したまう。諸邪業繫、能く礙うる者無し。故に増上縁と名づく。自余の衆行も、これ善と名づくといえども、もし念仏に比すれば、全く比校に非ず。この故に諸経の中に、処処に広く念仏の功能を讃ず。『無量寿経』の四十八願の中のごとき、ただ専ら弥陀の名号を念じて、生ずることを得と明す。また『弥陀経』の中のごとき、一日七日専ら弥陀の名号を念じて生ずることを得。また十方恒沙の諸仏、虚しからずと証誠したまう。またこの『経』の定散の文の中に、ただ専ら名号を念じて、生ずることを得と標す。この例一に非ず。広く念仏三昧を顕し竟んぬ。

『観念法門』に云く、また前のごとく、身相等の光、一一遍く十方世界を照らす、ただ専ら阿弥陀仏を念ずる衆生のみ有って、彼の仏の心光常にこの人を照して、摂護して捨てたまわず。すべて余の雑業の行者を、照摂することを論ぜず。

私に問うて曰く、仏の光明、ただ念仏の者のみを照らして、余行の者を照さざるは何に意有りや。答えて曰く、解するに二義有り。一には親縁等の三義、文のごとし。二には本願の義、謂く余行は本願に非ず。故にこれを照摂せず。念仏はこれ本願なり。故にこれを照摂す。故に善導和尚の『六時礼讃』に云く、「弥陀の身色金山のごとし。相好の光明十方を照らす。ただ念仏のみ有って、光摂を蒙る。まさに知るべし、本願最も強しと為す」。已上　また引く所の文の中に、「自余の衆善は、これ善と名づくといえども、もし念仏に比すれば、全く比校に非ず」と言うなりとは、意の云く、これ浄土門の諸行に約して比論する所なり。念仏は、これすでに二百一十億の中に、選取する所の妙行なり。諸行はこれすでに二百一十億の中に、選捨する所の粗行なり。故に「全く比校に非ず」と云う。また念仏はこれ本願の行、諸行はこれ本願に非ず。故に「全く比校に非ず」と云う。

〔第八　三心篇〕

念仏の行者必ず三心を具足すべきの文。

『観無量寿経』に云わく、もし衆生有って、彼の国に生ぜんと願う者は、三種の心を発して、すなわち往生す。何等をか三とす。一には至誠心、二には深心、三には回向発願心なり。三心を具する者は、必ず彼の国に生ず。

同経の『疏』に云く、『経』に「一者至誠心」と云うは、至とは真なり。誠とは実なり。一切衆生の身口意業に修する所の解行、必ず真実心の中に作すべきことを明さんと欲す。外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮を懐くことを得ざれ。貪嗔邪偽、奸詐百端にして、悪生侵め難く、事、蛇蝎に同じきは、三業を起すといえども、名づけて雑毒の善と為し、また虚仮の行と名づけ、真実の業と名づけず。もしかくのごときの安心起行を作す者は、たとい身心を苦励して、日夜十二時、急に走り急に作すこと、頭燃を炙うがごとくなるも、すべて雑毒の善と名づく。この雑毒の行を回して、彼の仏の浄土に生ぜんことを求めんと欲する者は、これ必ず不可なり。何を以ての故に。正しく彼の阿弥陀仏の因中に、菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も、三業に修する所、皆これ真実心の中に作し、およそ施為趣求する所、また皆真実なるに由ってなり。また真実に二種有り。一には自利の真実、二には利他の真実なり。自

利の真実と言うは、また二種有り。一には真実心の中に、自他の諸悪および穢国等を制捨して、行往坐臥に一切の菩薩の諸悪を制捨するに同じく、我れもまたかくのごとくならんと想う。二には真実心中に、自他凡聖等の善を勤修し、真実心中の口業に、彼の阿弥陀仏および依正二報を讃歎し、また真実心中の口業に三界六道等の自他の依正二報の苦悪の事を毀厭し、また一切衆生の三業に為す所の善を讃歎す。もし善業に非ざるは敬ってこれを遠ざけ、また随喜せざるなり。また真実心中の身業に合掌礼敬して、四事等をもって彼の阿弥陀仏および依正二報を供養す。また真実心中の身業にこの生死三界等の自他の依正二報を軽慢し厭捨す。また真実心中の意業に彼の阿弥陀仏および依正二報を思想、観察、憶念して目前に現ずるがごとくすべし。また真実心中の意業に、この生死三界等の自他の依正二報を軽賤し、厭捨す。不善の三業をば必ずすべからく真実心中に捨すべし。またもし善の三業を起せば、必ずすべからく真実心中に作すべし。内外明闇を簡ばず、皆すべからく真実なるべし。故に至誠心と名づく。

「二には深心」。深心と言うは、すなわちこれ深く信ずるの心なり。また二種有り。一には決定して、深く自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来常に没し、常に流転して、出離の縁有ること無しと信ず。二には決定して、深く彼の阿弥陀仏四十八

願をもって、衆生を摂受したまう。疑なく慮無く、彼の願力に乗じて、定んで往生を得と信ず。また決定して、深く釈迦仏この『観経』の三福九品、定散二善を説いて、彼の仏の依正二報を証讃して、人をして欣慕せしめたまうと信ず。また決定して、深く『弥陀経』の中に、十方恒沙の諸仏、一切凡夫決定して生ずることを得と証勧したまうと信ず。また深信とは、仰ぎ願わくは、一切の行者等、一心にただ仏語を信じて身命を顧みず、決定して依行せよ。仏の捨てしめたまう者はすなわち捨て、仏の行ぜしめたまう者をばすなわち行じ、仏の去らしめたまう処をばすなわち去れ。これを仏教に随順し、仏意に随順すと名づけ、これを仏願に随順すと名づけ、これを真の仏弟子と名づく。また一切の行者、ただ能くこの『経』に依って深く信じて行ずる者は、必ず衆生を悞らず。何を以ての故に。仏はこれ大悲を満足する人なるが故に。実語したまうが故に。仏を除いて已還は、智行いまだ満ぜず。その学地に在って、なお正習二障有っていまだ除かず、果願いまだ円ならず。これ等の凡聖は、たとい諸仏の教意を測量するも、いまだ決了すること能わず。平章すること有りといえども、要らずすべからく仏の証を請うて定と為すべし。もし仏意に称えば、すなわち印可して如是如是と言いたまう。もし仏意に可わざれば、すなわち汝等が説く所は、この義不如是と言いたまう。印せざる者は、すなわち無記、無利、無益の語に同じ。仏の印

可したまう者は、すなわち仏の正教に随順す。もし仏の所有る言説は、すなわちこれ正教・正義・正行・正解・正業・正智なり。もしは多、もしは少、すべて菩薩人天等を問わず、その是非を定むるなり。もし仏の所説はすなわちこれ了教なり。菩薩等の説は、ことごとく不了教と名づく。まさに知るべし。この故に今時仰いで勧む、一切有縁の往生人等、ただ深く仏語を信じて、専注奉行すべし。菩薩等の不相応の教を信用して、以て疑礙を為し、惑を抱いて自ら迷い、往生の大益を廃失すべからず。

また深心は、深信なりとは、決定して自心を建立して、教に順じて修行して、永く疑錯を除いて、一切の別解・別行・異学・異見・異執の為に、退失傾動せられざるなり。

問うて曰く、凡夫は智浅く、惑障処り深し。もし解行不同の人、多く経論を引き来って相い妨難し、証して一切罪障の凡夫、往生を得ずと云うに逢わば、云何が彼の難を対治して、信心を成就し、決定してただちに進んで、怯退を生ぜざらんや。答えて曰く、もし人有って、多く経論を引いて、証して生ぜずと云わば、行者すなわち報えて云え。仁者経論を将ち来って、証して生ぜずと道うといえども、我が意のごときは、決定して汝が破を受けず。何を以ての故に。然るに我れまたこれ彼の諸〳〵の経

論を信ぜざるにはあらず。ことごとく皆仰いで信ず。然れども仏、彼の経を説きたまう時は、処別に、時別に、対機別に、利益別なり。また彼の経を説きたまう時は、すなわち『観経』『弥陀経』等を説きたまうの時に非ず。然るに仏の説教は機に備う。時また同じからず。彼れはすなわち通じて人天菩薩の解行を説き、今は『観経』の定散二善を説いて、ただ韋提および仏滅後の五濁、五苦等の一切凡夫の為に、証して生ずることを得と言えり。この因縁の為に、我れ今一心にこの仏教に依り決定して奉行す。たとい汝等百千万億あって生ぜずと道うとも、ただ我が往生の信心を増長し成就せん。

また行者更に向って説いて言え。仁者善く聴け、我れ今汝の為に、更に決定の信相を説かん。たとい地前の菩薩・羅漢・辟支等、もしは一、もしは多、乃至十方に遍満して、皆経論を引いて、証して生ぜずと言うとも、我れまたいまだ一念の疑心を起さじ。ただ我が清浄の信心を増長し成就せん。何を以ての故に。仏語は決定成就の了義にして、一切の為に破壊せられざるに由るが故に。

また行者善く聴け。たとい初地已上、十地已来、もしは一、もしは多、乃至十方に遍満して、異口同音に皆、釈迦仏、弥陀を指讃し、三界六道を毀呰し、衆生を勧励して、専心に念仏し、および余善を修し、この一身を畢えて後、必定して彼の国に生

ずというは、これ必ず虚妄なり。依信すべからずと云わんに、我れこれ等の所説を聞くといえども、また一念の疑心を生ぜず。ただ我が決定上上の信心を増長し成就せん。何を以ての故に。すなわち仏語は、真実決了の義なるに由るが故に。仏はこれ実知・実解・実見・実証にして、これ疑惑心中の語に非ざるが故に。また一切の菩薩、異見異解の為に破壊せられず。もし実にこれ菩薩ならば、すべて仏教に違わざるなり。

またこの事を置く。行者まさに知るべし。たとい化仏・報仏、もしは一、もしは多、乃至十方に遍満して、各各に光を輝かし、舌を吐いて、遍く十方に覆って、一一に説いて、釈迦の所説相い讃じて、一切の凡夫を勧発して、専心に念仏しおよび余善を修し、回願して彼の浄土に生ずることを得というは、これはこれ虚妄なり。定んでこの事無しと言わんに、我れこれ等の諸仏の所説を聞くといえども、畢竟じて一念疑退の心を起して、彼の仏の国に生ずることを得ざらんことを畏れず。何を以ての故に。一仏は一切仏なり。所有る知見・解行・証悟・果位・大悲等同に少しの差別無し。この故に一仏の制する所は、すなわち一切の仏同じく制したまう。前仏の殺生十悪等の罪を制断したまうに、畢竟じて犯ぜず、行ぜざる者は、すなわち十善・十行・随順六度の義と名づくるがごとく、もし後仏出世すること有らんに、あに前の十善を改めて、十悪を行ぜしむべけんや。この道理を以て推験するに、明らかに知んぬ。諸

仏の言行は相い違失せず。たとい釈迦一切の凡夫を指勧し、この一身を尽して、専念専修して、命を捨てて已後、定んで彼の国に生ずというは、すなわち十方の諸仏も、ことごとく皆同じく讃じ、同じく勧め、同じく証したまう。何を以ての故に。同体の大悲なるが故に。一仏の所化は、すなわちこれ一切仏の化なり。一切仏の化は、すなわちこれ一仏の所化なり。すなわち『弥陀経』の中に説く、釈迦極楽の種種の荘厳を讃歎したまえり。また一切の凡夫、一日七日、一心に専ら弥陀の名号を念ずれば、定んで往生を得と勧めたまう。次、下の文に云く、「十方に各恒河沙等の諸仏有って、同じく釈迦能く五濁悪時・悪世界・悪衆生・悪見・悪煩悩・悪邪無信の盛んなる時において、弥陀の名号を指讃して、衆生称念すれば、必ず往生を得と勧励したまうを讃じたまう」と。すなわちその証なり。また十方の仏等、衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざらんことを恐畏れて、すなわちともに、同心同時に、各舌相を出して、遍く三千世界に覆って、誠実の言を説きたまう。汝等衆生、皆まさにこの釈迦の所説・所讃・所証を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近を問わず、ただ能く上百年を尽し、下一日七日に至るまで、一心に専ら、弥陀の名号を念ずれば、定んで往生を得ること、必ず疑い無きなり。この故に一仏の所説は、すなわち一切仏、同じくその事を証誠したまう。これを人に就いて信を立つと名づく。

次、行に就いて信を立つとは、然るに行に二種有り。一には正行、二には雑行なり。云云前の二行の中に引く所のごとし繁きを恐れて載せず見ん人意を得よ。

「三には回向発願心」。回向発願心と言うは、過去および今生の身口意業に修する所の世出世の善根および他の一切の凡聖の身口意業に修する所の世出世の善根を随喜し、この自他の所修の善根を以て、ことごとく皆真実深心の心の中に回向して、彼の国に生ぜんと願ず。故に回向発願心と名づく。また回向発願して、生ぜんと願ずる者は、必ずすべからく決定して真実心の中に回向し願じて、得生の想いを作すべし。この心深く信ずることなおし金剛のごとく、一切の異見・異学・別解・別行の人等の為に動乱破壊せられず。ただこれ決定して一心に投じ正直に進んで、彼の人の語を聞いてすなわち進退し、心に怯弱を生ずること有って、回顧落道して、すなわち往生の大益を失うことを得ざれ。

問うて曰く、もし解行不同邪雑の人等有って、来って相い惑乱し、あるいは種種の疑難を説いて往生を得ずと道い、あるいは云ん、汝等衆生、曠劫より已来、および今生の身口意業に一切凡聖の身上において、つぶさに十悪・五逆・四重・謗法・闡提・破戒・破見等の罪を造って、いまだ除尽すること能わず。然るにこれ等の罪は、三界の悪道に繋属す。云何ぞ一生の修福念仏をもって、すなわち彼の無漏無生の国に入っ

て、永く不退の位を証悟することを得んやと。答えて曰く、諸仏の教行、数、塵沙に越え、稟識の機縁、随情一に非ず。譬えば世間の人の、眼に見つべく信ずべきがごときは、明能く闇を破し、空は能く有を含み、地は能く載養し、水は能く生潤し、火は能く成壊するがごとし。かくのごとき等の事、ことごとく待対の法と名づく。目に即して見つべし。千差万別なり。何にいわんや仏法不思議の力、あに種種の益無からんや。随って一門を出ずれば、すなわち一煩悩門を出ず。随って一門に入れば、すなわち一解脱智慧門に入る。これに為って縁に随って行を起して、各〳〵解脱を求む。汝何を以てか、すなわち有縁に非ざる要行を将て、我れを障惑するや。然るに我が愛する所は、すなわちこれ我が有縁の行なり。すなわち汝が求むる所に非ず。汝が愛する所は、すなわちこれ汝が有縁の行なり。また我が求める所に非ず。この故に各〳〵楽う所に随って、その行を修すれば、必ず疾く解脱を得るなり。行者まさに知るべし。もし解を学せんと欲せば、凡より聖に至り、乃至仏果まで、一切無礙に、皆学すことを得よ。もし行を学せんと欲せば、必ず有縁の法に藉れ。少しく功労を用いるに、多く益を得るなり。

また一切の往生人等に白す。今更に行者の為に、一の譬喩を説いて、信心を守護して以て外邪異見の難を防がん。何者か是なるや。譬えば人有って、西に向って百千

の里を行かんと欲するがごとき、忽然として中路に二河有るを見る。一にはこれ火の河、南に在り。二にはこれ水の河、北に在り。二河各闊さ百歩、各深くして底無く、南北辺無し。正しく水火の中間に一の白道有り。闊さ四五寸許りなるべし。この道、東岸より西岸に至るまで、また長さ百歩なり。その水の波浪こもごも過ぎて道を湿し、その火の焔、また来って道を焼く。水火相い交って常に休息すること無し。この人すでに空曠の迥かなる処に至るに、更に人物無し。多く群賊悪獣のみ有り、この人の単独なるを見て、競い来って、殺さんと欲す。この人死を怖れて、ただちに走って西に向えば、忽然としてこの大河を見る。すなわち自ら念言すらく、この河南北辺畔を見ず。中間に一の白道を見るも極めてこれ狭小なり。二岸相い去ること近しといえども、何に由ってか行くべき。今日定めて死すこと疑わず。まさに到り回らんと欲すれば、群賊悪獣漸漸に来り逼む。まさに南北に避け走らんと欲すれば、悪獣毒虫、競い来って我れに向う。まさに西に向い道を尋ねて去らんと欲すれば、また恐らくはこの水火の二河に墮すことを。時に当って惶怖また言うべからず。すなわち自ら思念すらく、我れ今回るともまた死なん。住まるともまた死なん。去るともまた死なん。一種として死を勉れず、我れ、むしろこの道を尋ねて前に向って去らん。すでにこの道有り。必ずまさに度るべし。この念を作す時、東岸にたちまち人の勧むる声を

聞く。仁者ただ決定して、この道を尋ねて行け。必ず死の難無けん。もし住まらば、すなわち死なん。また西岸の上に人有って喚んで言く、汝一心正念にただちに来れ。我れ能く汝を護らん。すべて水火の難に堕すことを畏れざれと。この人すでにここに遣り、かしこに喚ぶを聞いて、すなわち自ら身心を正当にして、決定して道を尋ねて、ただちに進んで、疑怯退の心を生ぜず。あるいは行くこと一分二分するに、東岸の群賊等喚んで言く、仁者回り来れ。この道嶮悪にして過ぐることを得じ。必ず死すこと疑わず。我等すべて悪心をもって、相い向うこと無しと。この人喚ぶ声を聞くといえども、また回り顧ず。一心にただちに進んで、道を念うて行けば、須臾にすなわち西岸に到り、永く諸難を離れ、善友と相い見えて慶楽已むこと無し。これはこれ喩なり。

次に喩を合せば、東岸と言うは、すなわちこの娑婆の火宅に喩う。西岸と言うは、すなわち極楽の宝国に喩う。群賊悪獣詐り親しむと言うは、すなわち衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩う。人無き空迥の沢と言うは、すなわち常に悪友に随って、真の善知識に値わざるに喩う。水火の二河と言うは、すなわち衆生の貪愛は水のごとく、瞋憎は火のごときに喩う。中間の白道四五寸と言うは、すなわち衆生の貪瞋煩悩の中に、能く清浄の願往生の心を生ずるに喩う。すなわち貪瞋強きに由るが故にす

なわち水火のごとしと喩う。善心は微なるが故に白道のごとしと喩う。また水波常に道を湿すとは、すなわち愛心常に起って、能く善心を染汚するに喩う。また火焔常に道を焼くとは、すなわち瞋嫌の心、能く功徳の法財を焼くに喩う。人道の上を行きて、ただちに西に向うと言うは、すなわち諸〻の行業を回して、ただちに西方に向うに喩う。東岸に人の声あって、勧め遣るを聞いて、道を尋ねてただちに西に進むと言うは、すなわち釈迦すでに滅して後の人見ざれども、なお教法有って尋ぬべきに喩う。すなわちこれを喩えるに声のごとし。あるいは行くこと一分二分するに、群賊等喚び回すと言うは、すなわち別解・別行・悪見人等の妄りに見解を説いて、迭いに相い惑乱し、および自ら罪を造って退失するに喩う。西岸の上に人有って喚ぶと言うは、すなわち弥陀の願意に喩う。須臾に西岸に到れば、善友相い見えて喜ぶと言うは、すなわち衆生久しく生死に沈んで、曠劫に輪回し、迷倒自纏して、解脱するに由し無し。仰いで釈迦発遣して西方に指し向わしむるを蒙り、また弥陀の悲心をもって、招喚したまうに藉って、今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず。念念に遺るること無く、彼の願力の道に乗じて、命を捨てて已後、彼の国に生ずることを得て、仏と相い見えて、慶喜何ぞ極らんというに喩う。また一切の行者、行住坐臥、三業に修する所、昼夜時節を問うこと無く、常にこの解を作し、常にこの想を作す。故に回向発願心と

名づく。また回向と言うは、彼の国に生じ已って、還って大悲を起し、生死に回入して、衆生を教化するをまた回向と名づく。三心すでに具すれば、行として成ぜずということ無し。願行すでに成じて、もし生ぜずばこの処有ること無し。またこの三心は、また通じて定善を摂する義まさに知るべし。

『往生礼讃』に云く、問うて曰く、今人を勧めて、往生せしめんと欲せば、いまだ知らず、若為が安心し、起行し、作業して、定んで彼の国土に往生することを得るや。答えて曰く、必ず彼の国土に生ぜんと欲せば、『観経』に説くがごときは、三心を具すれば必ず往生を得。何等をか三とす。一には至誠心、いわゆる身業に彼の仏を礼拝し、口業に彼の仏を讃歎称揚し、意業に彼の仏を専念観察す。およそ三業を起すに、必ずすべからく真実なるべし。故に至誠心と名づく。二には深心、すなわちこれ真実の信心なり。自身はこれ煩悩を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流転して、火宅を出でずと信知し、今弥陀の本弘誓願、名号を称すること、下、十声一声等に至るに及ぶまで、定んで往生を得と信知して、乃至一念も疑心有ること無し。故に深心と名づく。三には回向発願心、作す所の一切の善根、ことごとく皆回して往生を願ず。故に回向発願心と名づく。この三心を具すれば、必ず生ずることを得。もし一心をも少けぬれば、すなわち生ずることを得ず。『観経』につぶさに説くがごとし。まさに知

るべし。

私に云く、引く所の三心はこれ行者の至要なり。所以は何。『経』にはすなわち「三心を具する者は、必ず彼の国に生ず」と云う。明らかに知んぬ。三を具して必ず生ずることを得べし。『釈』にはすなわち「もし一心をも少けぬればすなわち生ずることを得ず」と云う。明らかに知んぬ。一も少けぬれば、これ更に不可なることを。これに因って極楽に生ぜんと欲せん人は、全く三心を具足すべし。その中に至誠心とはこれ真実の心なり。その相、彼の文のごとし。ただし外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くとは、外は内に対する辞なり。謂く、外相と内心と調はざる意なり。すなわちこれ外は智にして内は愚なり。賢は愚に対する言なり。謂く、外はこれ賢にして、内はすなわち愚なり。善は悪に対する辞なり。謂く、外はこれ善にして、内はすなわち悪なり。精進は懈怠に対する言なり。謂く、外には精進の相を示し、内にはすなわち懈怠の心を懐く。もしそれ外を翻じて内に蓄えば祇に出要に備うべし。「内懐虚仮」等とは、内は外に対する辞なり。謂く、内心と外相と調はざる意なり。すなわちこれ内は虚にして、外は実なり。虚は実に対する言なり。謂く、内は虚、外は実なる者なり。仮は真に対する辞な

り。謂く、内は仮にして外は真なり。もしそれ内を翻じて外に播さば、また出要に足るべし。

次に深心とは、謂く深く信ずる心なり。まさに知るべし。生死の家には、疑を以て所止と為し、涅槃の城には、信を以て能入と為す。故に今二種の信心を建立して、九品の往生を決定する者なり。またこの中に、一切の別解・別行・異学・異見等と言うは、これ聖道門の解行学見を指す。その余はすなわちこれ浄土門の意なり。文に在って見るべし。明らかに知んぬ。善導の意、またこの二門を出でず。

回向発願心の義、別の釈を俟つべからず。行者まさにこれを知るべし。この三心は総じてこれを言えば、諸〳〵の行法に通じ、別してこれを言わば、往生の行に在り。いま通を挙て別を摂す。意すなわち周し。行者能く用心して、あえて忽諸せしむること勿れ。

〔第九　四修法篇〕

念仏の行者四修の法を行用すべきの文。

善導の『往生礼讃』に云く、また勧めて四修の法を行ぜしむ。何者をか四とす。一には恭敬修。いわゆる彼の仏、および彼の一切の聖衆等を恭敬礼拝す。故に恭敬修と名づく。畢命を期として、誓って中止せざる、すなわちこれ長時修なり。二には無余修。いわゆる専ら彼の仏の名を称して、彼の仏および一切の聖衆等を、専念し、専想し、専礼し、専讃して、余業を雑えず。故に無余修と名づく。畢命を期として誓って中止せざる、すなわちこれ長時修なり。三には無間修。いわゆる相続して、恭敬礼拝し、称名讃歎し、憶念観察し、回向発願し、心心に相続して、余業を以て来し間えず。故に無間修と名づく。また貪瞋煩悩を以て来し間えず。随犯随懺して、念を隔て、時を隔て、日を隔てしめず。常に清浄ならしめるをまた無間修と名づく。畢命を期として、誓って中止せざる、すなわちこれ長時修なり。

『西方要決』に云く、ただ四修を修するを以て正業とす。一には長時修。初発心より乃至菩提まで、恒に浄因を作して、ついに退転すること無し。二には恭敬修。これにまた五有り。一には有縁の聖人を敬う。謂く行住坐臥、西方に背かず、涕唾便痢、西方に向わず。二には有縁の像教を敬う。謂く西方の弥陀の像変を造る。広く

作ること能はざれば、ただ一仏二菩薩を作るもまた得たり。教とは『弥陀経』等を、五色の袋に盛れて、自ら読み他を教えてこの経像を室中に安置して、六時に礼懺し、香華供養して、特に尊重を生せ。三には有縁の善知識を敬う。謂く浄土の教を宣べる者は、もしは千由旬十由旬より已来、ならびにすべからく敬重し親近し供養すべし。別学の者にも、すべて敬心を起し、己と同じからざるをも、ただ深く敬うことを知れ。もし軽慢を生ずれば、罪を得ること窮まり無し。故にすべからくすべて敬うべし。すなわち行障を除く。四には同縁の伴を敬う。謂く同修業の者なり。自ら障重くして、独業成ぜずといえども、要ず良朋に藉って、まさに能く行を作す。危うきを扶け厄を救い、力を助けて相い資く。同伴の善縁、深く相い保重せよ。五には三宝を敬う。同体別相、ならびに深く敬うべし。つぶさに録すること能わず。浅行の者の、依修することを果さざるに為ってなり。住持三宝とは、今の浅識の与に大因縁と作る。今ほぼ料簡せば、仏宝と言うは、謂く檀を雕り、綺に繡い、素質金容、玉を鏤め、繒に図し、石を磨き、土を削る、この霊像特に尊承すべし。暫爾、形を観れば、罪消じ福を増す。もし少慢を生ずれば、悪を長じ善亡ず。ただし尊容を想うこと、まさに真仏を見るがごとくすべし。法宝と言うは、三乗の教旨、法界所流の名句の所詮なり。能く解を生ずるの縁なり。故にすべからく珍仰すべし。慧を発するの基なるを以

てなり。尊経を鈔写して、恒に浄室に安じ、箱篋に盛れ貯えて、ならびに厳敬すべし。読誦の時は、身手清潔にせよ。僧宝と言うは、聖僧と菩薩と破戒との流、等心に敬を起せ。慢想を生ずること勿れ。三には無間修。謂く常に念仏して、往生の心を作す。一切の時において、心に恒に想巧すべし。譬えばもし人有って、他に抄掠せられて、身下賤と為ってつぶさに艱辛を受く。たちまち父母を思って、走って国に帰らんと欲すれども、行装いまだ弁ぜず。なお他郷に在って、日夜に思惟して、苦しみ堪え忍びず。時として暫くも捨てて、爺嬢を念ぜざること無し。計を為すことすでに成って、すなわち帰って達することを得て、父母に親近し、縦任に歓娯す。行者もまた然なり。往し煩悩に因って、善心を壊乱し、福智の珍財ならびに皆散失す。久しく生死に流れて、制するに自由ならず。恒に魔王の与に、僕使と作って、六道に駆馳せられて、身心を苦切す。今善縁に遇って、たちまち弥陀慈父の弘願に違せず。群生を済抜したまうを聞いて、日夜に驚忙し、発心して往くことを願ず。所以に精懃して倦まず、まさに仏恩を念じて、報の尽きるを期と為して、心に恒に計念すべし。四には無余修。謂く専ら極楽を求めて、弥陀を礼念す。ただ諸余の業行雑起せしめざれ。所作の業には、日別にすべからく念仏読経を修して、余課を留めざるべし。

私に云く、四修の文見つべし。繁を恐れて解せず。ただし前の文の中に、すでに四修と云って、ただ三修有り。もしはその文を脱するか。もしはその意有りや。更に脱文に非ず、その深意有り。何を以てか知ることを得る。四修とは、一には長時修、二には慇重修、三には無余修、四には無間修なり。而るに初めの長時は、ただこれ後の三修に、通用するを以てなり。謂く、慇重もし退せば、慇重の行、すなわち成ずべからず。無余もし退せば、無余の行、すなわち成ずべからず。無間もし退せば、無間の修、すなわち成ずべからず。この三修の行を成就せしめんが為に、皆長時を以て、三修に属して、通じて修せしむる所なり。故に三修の下に、皆結して畢命を期として誓って中止せざる、すなわちこれ長時修と云うこれなり。例せば彼の精進、余の五度に通ずるがごときのみ。

〔第十　化仏讃歎篇〕

弥陀化仏の来迎、聞経の善を讃歎せず、ただ念仏の行を讃歎したまうの文。

『観無量寿経』に云わく、あるいは衆生有って、衆〻の悪業を作って、方等経典を誹謗せずといえども、かくのごときの愚人、多く衆悪を造って、慚愧有ること無し。命終らんと欲する時、善知識の為に大乗の十二部経の首題の名字を讃ずるに遇えり。かくのごときの諸経の名を聞くを以ての故に、千劫の極重の悪業を除却す。智者また教えて、合掌叉手して、南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するが故に、五十億劫の生死の罪を除く。その時彼の仏、すなわち化仏、化観世音、化大勢至を遣わし、行者の前に至らしめ、讃じて言わく、善男子、汝仏名を称するが故に、諸〻の罪消滅すれば、我れ来って汝を迎うと。

同経の『疏』に云く、聞く所の化讃、ただ称仏の功を述べて、我れ来って汝を迎うと、聞経の事を論ぜず。然るに仏の願意に望むれば、ただ正念に、名を称することを勧む。往生の義、疾きこと雑散の業に同じからず。この経および諸部の中のごとき処処に広く歎じ、勧めて名を称せしめるを、まさに要益と為す。まさに知るべし。

私に云く、聞経の善は、これ本願に非ず。雑業なるが故に、化仏讃ぜず。念仏の行は、これ本願正業なるが故に化仏讃歎す。加之、聞経と念仏と滅罪の多少同じからず。『観経の疏』に云く、「問うて曰く、何が故ぞ聞経は十二部、ただ罪

を除くこと千劫、称仏は一声、すなわち罪を除くこと五百万劫なるは、何の意ぞや。答えて曰く、造罪の人、障り重く、加えるに死苦来逼を以てす。善人多経を説くといえども、飡受の心、浮散す。心散ずるに由るが故に、罪を除くことや軽し。また仏名はこれ一なり。すなわち能く散を摂して、以て心を住せしむ。また教えて正念に名を称せしむ。心重きに由るが故に、すなわち能く罪を除くこと多劫なり」。

〔第十一　雑善に約対して念仏を讃歎する篇〕

雑善に約対して念仏を讃歎するの文。

『観無量寿経』に云わく、もし念仏せん者、まさに知るべし、この人はすなわちこれ人中の芬陀利華なり。観世音菩薩、大勢至菩薩その勝友と為る。まさに道場に坐し諸仏の家に生るべし。

同経の『疏』に云く、「若念仏者」より、下「生諸仏家」に至る已来は、正しく念

仏三昧の功能超絶して、実に雑善をもって比類と為すことを得るに非ざることを顕す。すなわちその五有り。一には専ら弥陀仏の名を念ずることを明し、二には能念の人を指讃することを明し、三にはもし能く相続して念仏する者は、この人はなはだ希有なりとし、更に物の以てこれに方ぶべき無し。故に芬陀利を引いて喩と為すことを明す。芬陀利と言うは人中の好華と名づけ、また希有華と名づけ、また人中上上華と名づけ、また人中妙好華と名づく。この華相い伝えて蔡華と名づくこれなり。もし念仏する者は、すなわちこれ人中の好人・人中の妙好人・人中の上上人・人中の希有人・人中の最勝人なり。四には専ら弥陀の名を念ずる者は、すなわち観音勢至常随影護したまい、また親友知識のごとくなることを明す。五には今生すでにこの益を蒙る、命を捨ててすなわち諸仏の家に入る。すなわち浄土これなり。かしこに到れば長時に法を聞いて歴事供養す。因円かに果満ず。道場の座あに賒ならんやということを明す。

私に問うて曰く、『経』に「若念仏者当知此人等」と云うは、ただ念仏の者に約してこれを讃歎す。釈家何の意有って実に雑善をもって比類と為すことを得るに非ずと云って、雑善に相対して独り念仏を歎ずるや。答えて曰く、文の中に

隠れたりといえども、義意これ明らかなり。知る所以は、この『経』すでに定散の諸善ならびに念仏の行を説く。而るにその中において孤り念仏を標して芬陀利に喩う。雑善に待するに非ずば、云何ぞ能く念仏の功の余善諸行に超えたることを顕さん。然ればすなわち、念仏する者はすなわちこれ人中の好人とは、これ悪に待して美むる所なり。人中の妙好人と言うは、これ粗悪に待して称する所なり。人中の上上人と言うは、これ下下に待して讃ずる所なり。人中の希有人と言うは、これ常有に待して歎ずる所なり。人中の最勝人と言うは、これ最劣に待して褒むる所なり。

問うて曰く、すでに念仏を以て上上と名づけば、何が故ぞ上上品の中に説かずして下下品に至って念仏を説くや。答えて曰く、あに前に云わずや、念仏の行は広く九品に亘ると。すなわち前に引く所の『往生要集』に、「その勝劣に随ってまさに九品を分つべし」と云うこれなり。加之、下品下生はこれ五逆重罪の人なり。而るに能く逆罪を除滅すること余行の堪えざる所、ただ念仏の力のみ有って、能く重罪を滅するに堪えたり。故に極悪最下の人の為に極善最上の法を説く所、例せば彼の無明淵源の病は、中道府蔵の薬に非ざれば、すなわち治すること能わざるがごとし。今この五逆は重病の淵源なり。またこの念仏は霊薬

府蔵なり。この薬に非ざれば、何ぞこの病を治せん。故に弘法大師の『二教論』に『六波羅蜜経』を引いて云く、「第三に法宝とは、いわゆる過去無量の諸仏所説の正法とおよび我が今の所説となり。いわゆる八万四千の諸〳〵の妙法蘊なり。乃至有縁の衆生を調伏し純熟す。しかも阿難陀等の諸大弟子をして一たび耳に聞いて皆ことごとく憶持せしむ。摂して五分と為す。一には素咀纜、二には毘奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜多、五には陀羅尼門なり。この五種の蔵をもって有情を教化し、度すべき所に随って為にこれを説く。もし彼の有情、山林に処し、常に閑寂に居し、静慮を修せんと楽う者には、しかも彼れが為に素咀纜蔵を説く。もし彼の有情、威儀を習い正法を護持し、一味和合して久住することを得せしめんと楽うには、しかも彼れが為に毘奈耶蔵を説く。もし彼の有情、正法を説き性相を分別し、循環研覈して、甚深を究竟せんと楽うには、しかも彼れが為に阿毘達磨蔵を説く。もし彼の有情、大乗真実の智慧を習って、我法執著の分別を離れんと楽うには、しかも彼れが為に般若波羅蜜多蔵を説く。もし彼の有情、契経と調伏と対法と般若とを受持すること能わず、あるいはまた有情、諸〳〵の悪業たる四重・八重・五無間罪・謗方等経・一闡提等の種種の重罪を造って、銷滅することを得て、速やかに疾く解脱し、頓に涅槃を悟らしめるには、し

かも彼れが為に諸〳〵の陀羅尼蔵を説く。この五法蔵は、譬えば乳・酪・生蘇・熟蘇および妙醍醐のごとし。契経は乳のごとく、調伏は酪のごとく、対法教は彼の生蘇のごとく、大乗般若はなおし熟蘇のごとく、総持門は譬えば醍醐のごとし。醍醐の味は乳、酪、蘇の中に微妙第一なり。能く諸病を除いて、諸〳〵の有情をして身心安楽ならしむ。総持門は、契経等の中に最も第一とす。能く重罪を除き諸〳〵の衆生をして、生死を解脱して、速やかに涅槃安楽の法身を証せしむ」。

已上　この中の五無間罪とはこれ五逆罪なり。すなわち醍醐の妙薬に非ざれば、五無間の病、はなはだ療し難しと為す。念仏もまた然なり。往生教の中には念仏三昧は、これ総持のごとくまた醍醐のごとし。もし念仏三昧の醍醐の薬に非ざれば、五逆深重の病、はなはだ治し難しと為す。まさに知るべし。問うて曰く、もし爾らば下品上生はこれ十悪軽罪の人なり。何が故ぞ念仏を説くや。答えて曰く、念仏三昧は重罪なお滅す。いかにいわんや軽罪をや。余行は然らず。あるいは軽を滅して重を滅せざる有り、あるいは一を消して二を消せざる有り。念仏は然らず。軽重兼ね滅し、一切遍く治す。譬えば阿伽陀薬の遍く一切の病を治するがごとし。故に念仏を以て王三昧とす。およそ九品の配当は、これ一往の義なり。五逆の回心、上上に通じ、読誦の妙行また下下に通ず。十悪軽罪・破

戒次罪各〳〵上下に通じ、解第一義・発菩提心また上下に通ず。一法に各〳〵九品有り。もし品に約せばすなわち九九八十一品なり。加之、迦才の云く、「衆生の行を起すにすでに千殊有り。往生して土を見ることまた万別有るなり」と。一往の文を見て封執を起すこと莫れ。その中に念仏は、これすなわち勝行なり。故に芬陀利を引いて以てその喩とす。譬の意まさに知るべし。加之、念仏の行者をば観音勢至、影と形とのごとく暫くも捨離せず。余行は爾らず。また念仏する者は、命を捨てて已後決定して極楽世界に往生す。余行は不定なり。およそ五種の嘉誉を流え二尊の影護を蒙る。これはこれ現益なり。また浄土に往生して乃至成仏す。これはこれ当益なり。また道綽禅師、念仏の一行において、始終の両益を立つ。『安楽集』に云く、「念仏の衆生は摂取して捨てたまわず、寿尽きて必ず生ず。これを始益と名づく。終益と言うは、『観音授記経』に依るに、云く阿弥陀仏の住世長久、兆載永劫にして、また滅度したまうこと有り。般涅槃の時、ただ観音勢至有って安楽を住持して十方を接引す。その仏の滅度また住世の時節と等同なり。然るに彼の国の衆生、一切仏を覩見する者有ること無し。ただ一向に専ら阿弥陀仏を念じて往生する者のみ有って、常に弥陀現在して、滅したまわざるを見る。これはすなわちこれその終益なり」。已上　まさに知るべし。

念仏はかくのごとき等の、現当二世始終の両益有り。まさに知るべし。

〔第十二　仏名を付属する篇〕

釈尊定散の諸行を付属せず、ただ念仏を以て阿難に付属したまうの文。

『観無量寿経』に云わく、仏阿難に告げたまわく、汝好くこの語を持て。この語を持てとはすなわちこれ無量寿仏の名を持てとなり。

同経の『疏』に云く、「仏告阿難汝好持是語」より已下は、正しく弥陀の名号を付属して、遐代に流通することを明す。上来定散両門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば、意衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り。

私に云く、『疏』の文を案ずるに二行有り。一には定散、二には念仏なり。初めに定散と言うはまた分ちて二とす。一には定善、二には散善なり。初めに定善に付いて、その十三有り。一には日想観、二には水想観、三には地想観、

四には宝樹観、五には宝池観、六には宝楼閣観、七には華座観、八には像想観、九には阿弥陀仏観、十には観音観、十一には勢至観、十二には普往生観、十三には雑想観、つぶさには『経』に説くがごとし。たとい余の行無しといえども、あるいは一、あるいは多、その堪ゆる所に随って十三観を修して往生を得べし。その旨『経』に見えたり。あえて疑慮すること莫れ。

次に散善に付いて二有り。一には三福、二には九品。初めに三福とは『経』に曰く、「一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず十善業を修す。二には三帰を受持し、衆戒を具足して威儀を犯さず。三には菩提心を発し深く因果を信じ、大乗を読誦し、行者を勧進す」。已上経文。孝養父母とは、これに付いて二有り。一には世間の孝養、二には出世の孝養なり。世間の孝養とは『孝経』等に説くがごとし。出世の孝養とは律の中の生縁奉事の法のごとし。奉事師長とはこれに付いてまた二有り。一には世間の師長、二には出世の師長なり。世間の師とは、仁義礼智信等を教えるの師なり。出世の師とは、聖道浄土の二門等を教えるの師なり。たとい余の行無しといえども孝養奉事を以て往生の業とす。慈心不殺、修十善業とはこれに就いて二義有り。一には初めに慈心不殺とは、これ四無量心の中の初めの慈無量なり。すなわち初めの一を挙げて後の三を

摂す。たとい余の行無しといえども、四無量心を以て往生の業とす。次に修十善業とは一には不殺生、二には不偸盗、三には不邪婬、四には不妄語、五には不綺語、六には不悪口、七には不両舌、八には不貪、九には不瞋、十には不邪見なり。二には慈心不殺、修十善業の二句を合して一句と為す。謂く、初めに慈心不殺とはこれ四無量の中の慈無量には非ず。これ十善の初めの不殺を指す。故に知んぬ、正しくこれ十善の一句なることを。たとい余の行無しといえども十善業を以て往生の業とす。受持三帰とは仏法僧に帰依するなり。これに就いて二有り。一には大乗の三帰、二には小乗の三帰なり。具足衆戒とはこれに二有り。一には大乗戒、二には小乗戒なり。不犯威儀とはこれにまた二有り。一には大乗、謂く八万有り。二には小乗、謂く三千有り。発菩提心とは諸師の意不同なり。天台にはすなわち四教の菩提心有り。謂く蔵通別円これなり。つぶさには『止観』に説くがごとし。真言にはすなわち三種の菩提心有り。謂く行願と勝義と三摩地とこれなり。つぶさには『菩提心論』に説くがごとし。華厳にまた菩提心有り。彼の『菩提心義』および『遊心安楽道』等に説くがごとし。三論・法相に各〻菩提心有り。つぶさには彼の宗の章疏等に説くがごとし。また善導所釈の菩提心有り。つぶさには『疏』に述するがごとし。発菩提心その言一なりとい

えども、各〳〵その宗に随ってその義同じからず。然ればすなわち菩提心の一句は、広く諸経に亘り、遍く顕密を該ぬ。意気博遠にして詮測沖懇なり。願わくは諸〳〵の行者一を執して万を遮すること莫れ。諸〳〵の往生を求めん人各〳〵すべからく自宗の菩提心を発すべし。たとい余の行無しといえども、菩提心を以て往生の業とするなり。深信因果とはこれに付いて二有り。一には世間の因果、二には出世の因果なり。世間の因果とはすなわち六道の因果なり。『正法念経』に説くがごとし。出世の因果とはすなわち四聖の因果なり。諸〳〵の大小乗経に説くがごとし。もしこの因果の二法を以て遍く諸経を摂せば、諸家同じからず。且く天台に依れば、謂く華厳には仏菩薩二種の因果を説き、阿含には声聞・縁覚二乗の因果を説き、方等の諸経には四乗の因果を説き、般若の諸経には通別円の因果を説き、法華には仏因仏果を説き、涅槃にはまた四乗の因果を説く。然ればすなわち深信因果の言遍普く一代を該羅せり。諸〳〵の往生を求めん人たとい余の行無しといえども、深信因果を以て往生の業と為すべし。読誦大乗とは分ち二とす。一には読誦、二には大乗なり。読誦とはすなわちこれ五種法師の中に、転読・諷誦の二師を挙げて、受持等の三師を顕わす。もし十種法行に約せば、すなわちこれ披読・諷誦の二種の法行を挙げて書写供養等の八種の法行を顕わす。大乗とは

小乗を簡ぶ言なり。別に一経を指すに非ず。通じて一切の諸大乗経を指す。謂く一切とは仏意広く一代所説の諸大乗経を指す。而るに一代の所説において已結集の経有り、未結集の経有り。また已結集の経においてあるいは龍宮に隠れて人間に流布せざる経有り。あるいは天竺に留まって、いまだ漢地に来到せざる経有り。而るに今翻訳将来の経に就いてこれを論ぜば、『貞元の入蔵録』の中に始め『大般若経』六百巻より、『法常住経』に終るまで、顕密の大乗経すべて六百三十七部二千八百八十三巻。皆すべからく読誦大乗の一句に摂すべし。西方を願う行者各〳〵その意楽に随って、あるいは法華を読誦して以て往生の業と為し、あるいは華厳を読誦して以て往生の業と為し、あるいは遮那教王および諸尊法等を受持読誦して以て往生の業と為す。あるいは般若方等および涅槃経等を解説し書写して以て往生の業と為す。これすなわち浄土宗の『観無量寿経』の意なり。

問うて曰く、顕密旨異なり、何ぞ顕の中に密を摂するや。答えて曰く、これは顕密の旨を摂すと云うには非ず。『貞元の入蔵録』の中に同じくこれを編みて大乗経の限に入る。故に読誦大乗の一句に摂す。

問うて曰く、爾前の経の中に何ぞ法華を摂するや。答えて曰く、今言う所の摂

とは権実偏円等の義を論ずるには非ず。読誦大乗の言、普く前後の大乗諸経に通ず。前とは『観経』已前の諸大乗経これなり。後とは王宮已後の諸大乗経これなり。ただ大乗と云って権実を選ぶこと無し。然ればすなわち正しく華厳・方等・般若・法華・涅槃等の諸大乗経に当れり。勧進行者とは、謂く定散の諸善および念仏三昧等を勧進するなり。

次に九品とは、前の三福を開して九品の業と為す。謂く上品上生の中に「慈心不殺」と言うは、すなわち上の世福の中の第三の句に当れり。次に「具諸戒行」とは、すなわち上の戒福の中の第二の句の「具足衆戒」に当れり。次に「読誦大乗」とは、すなわち上の行福の中の第三の句の「読誦大乗」に当れり。次に「修行六念」とは、すなわち上の第三の福の中の第三の句の意なり。上品中生の中に「善解義趣」等と言うは、すなわちこれ上の第三の福の中の第二第三の意なり。上品下生の中に「深信因果発道心」等と言うは、すなわちこれ上の第三の福の第一第二の意なり。中品上生の中に「受持五戒」等と言うは、すなわち上の第二の福の中の第二の句の意なり。中品中生の中に「或一日一夜受持八戒斎」等と言うは、また上の第二の福の意に同じ。中品下生の中に「孝養父母行世仁慈」等と言うは、すなわち上の初めの福の第一第二の句の意なり。下品上生とはこれ

十悪の罪人なり。臨終の一念に罪滅して生ずることを得。下品中生はこれ破戒の罪人なり。臨終に仏の依正の功徳を聞いて罪滅して生ずることを得。下品下生はこれ五逆の罪人なり。臨終の十念に罪滅して生ずることを得。この三品は尋常の時ただ悪業を造って往生を求めずといえども、臨終の時始めて善知識に遇ってすなわち往生を得。もし上の三福に准ぜば第三福の大乗の意なり。定善散善大概かくのごとし。文にすなわち「上来雖説定散両門之益」と云うこれなり。

次に念仏とは、専ら弥陀仏の名を称するこれなり。念仏の義常のごとし。今正しく弥陀の名号を付属して、遐代に流通することを明すと言うは、およそこの『経』の中にすでに広く定散の諸行を説くといえども、すなわち定散を以て阿難に付属して後世に流通せしめずして、ただ念仏三昧の一行を以てすなわち阿難に付属して遐代に流通せしむ。

問うて曰く、何が故ぞ定散の諸行を以て付属流通せざるや。もしそれ業の浅深に依って嫌って付属せずば、三福業の中に浅有り、深有り。その浅業は「孝養父母」、「奉事師長」なり。その深業は「具足衆戒」、「発菩提心」、「深信因果」、「読誦大乗」なり。すべからく浅業を捨てて、深業を付属すべし。もし観の浅深に依って嫌って付属せずば、十三観の中に浅有り、深有り。その浅観は日想水想これな

り。その深観は始め地観より雑想観に終るまですべて十一観これなり。すべからく浅観を捨てて深観を付属すべし。中に就いて第九の観はこれ阿弥陀仏観なり。すなわちこれ観仏三昧なり。すべからく十二観を捨てて、観仏三昧を付属すべし。中に就いて『同疏』の玄義分の中に云く、「この『経』は観仏三昧を宗と為し、また念仏三昧を宗と為す」と。すでに二行を以て一経の宗と為す。何ぞ観仏三昧を廃して念仏三昧を付属するや。答えて曰く、「仏の本願に望むるに、意衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り」と云う。定散の諸行は本願に非ざるが故にこれを付属せず。またその中において、観仏三昧は殊勝の行なりといえども仏の本願に非ず。故に付属せず。念仏三昧はこれ仏の本願なり。故に以てこれを付属す。「望仏本願」と言うは、『双巻経』の四十八願の中の第十八願を指す。「一向専称」と言うは、『同経』の三輩の中の「一向専念」を指す。本願の義つぶさには前に弁ずるがごとし。問うて曰く、もし爾らば何が故ぞ直に本願念仏の行を説かずして、煩わしく非本願の定散諸善を説くや。答えて曰く、本願念仏の行は『双巻経』の中に委くすでにこれを説く。故に重ねて説かざるのみ。また定散を説くことは、念仏の余善に超過することを顕さんが為なり。もし定散無くば、何ぞ念仏の特り秀でたることを顕さん。例せば法華の三説の上に秀で

たるがごとし。もし三説無くんば何ぞ法華の第一なることを顕さん。故に今定散は廃の為にしかも説き、念仏三昧は立せんが為にしかも説く。

ただし定散の諸善皆用て測り難し。およそ定善とはそれ依正の観、鏡を懸けて照臨し、往生の願、掌を指して速疾なり。あるいは一観の力能く多劫の罪愆を祛け、あるいは具憶の功、ついに三昧の勝利を得。然ればすなわち往生を求めん人、宜しく定観を修行すべし。中に就いて第九の真身観は、これ観仏三昧の法なり。行もし成就すればすなわち弥陀の身を見る。弥陀を見るが故に諸仏を見ることを得。諸仏を見るが故に、現前に授記せらる。この観の利益最も甚深なり。然るに今『観経』の流通分に至って、釈迦如来、阿難に告命して往生の要法を付属し流通せしむるに因って、観仏の法を嫌って、なお阿難に付属せず、念仏の法を選んで、すなわち以て阿難に付属す。観仏三昧の法なお以て付属せず。何にいわんや日想水想等の観においてをや。然ればすなわち十三定観は皆以て付属せざる所の行なり。然るに世人もし観仏等を楽って、念仏を修せざるは、これ遠くは弥陀の本願に乖くのみに非ず。またこれ近くは釈尊の付属に違す。行者宜しく商量すべし。

次に散善の中に大小持戒の行有り。世皆以為らく、持戒の行はこれ入真の要

なり。破戒の者は往生すべからずと。また菩提心の行 有り。人皆以為らく菩提心はこれ浄 土の綱要なり。もし菩提心無き者はすなわち往生すべからずと。また解第一義の行 有り。これはこれ理観なり。人また以為らく、理はこれ仏の源 なり。理を離れては仏土を求むべからず。もし理観無き者は往生すべからずと。また読誦大乗の行 有り。人皆以為らく、大乗 経を読誦せば、すなわち往生すべし。もし読誦の行 無き者は往生すべからずと。これに就いて二 有り。一には持経、二には持呪なり。持経とは『般若』・『法華』等の諸大乗 経を持するなり。持呪とは『随求』・『尊勝』・『光明』・『阿弥陀』等の諸〳〵 の神呪を持するなり。およそ散善の十一人、皆貴しといえども、しかもその中においてこの四箇の行は当世の人、殊に欲する所の行なり。これらの行を以て、殆んど念仏を仰う。つらつら『経』の意を尋ねれば、この諸行を以て付属し流通せず。ただ念仏の一行を以てすなわち後世に付属し流通せしむ。まさに知るべし、釈 尊諸行を付属したまわざる所以は、すなわちこれ弥陀の本願に非ざるが故なり。また念仏を付属したまう所以は、すなわちこれ弥陀の本願なるが故なり。今また善導和尚 諸行を廃して念仏に帰せしむる所以は、すなわち弥陀の本願たるの上、またこれ釈 尊付属の行なればなり。故に知んぬ。諸行は機に非ず、時を失えり。念仏往生は機に当り、時を得た

り。感応あに唐捐ならんや。まさに知るべし。随他の前には暫く定散の門を開くといえども、随自の後には還って定散の門を閉づ。一たび開いて以後永く閉じざるはただこれ念仏の一門なり。弥陀の本願、釈尊の付属、意ここに在り、行者まさに知るべし。またこの中に遐代とは、『双巻経』の意に依るに、遠く末法万年の後の百歳の時を指す。これすなわち遐きを挙げて邇きを摂する。然れば法滅の後、なお以て然なり。何にいわんや末法をや。末法すでに然り。何にいわんや正法像法をや。故に知んぬ、念仏往生の道は正像末の三時および法滅百歳の時に通ずということを。

〔第十三　念仏多善根篇〕

念仏を以て多善根と為し、雑善を以て少善根と為すの文。

『阿弥陀経』に云わく、少善根福徳の因縁を以て、彼の国に生ずることを得べからず。舎利弗、もし善男子、善女人有って、阿弥陀仏を説くを聞いて、名号を執持す

ること、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、一心不乱なれば、その人命終の時に臨んで、阿弥陀仏諸〻の聖衆とともに、その前に現在したまう。この人終る時、心顚倒せずして、すなわち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得。

善導この文を釈して云く、極楽は無為涅槃の界なれば、随縁の雑善恐らくは生じ難し。故に如来要法を選んで、教えて弥陀を念ずること、専にしてまた専ならしむ。七日七夜、心無間に長時の起行もますます皆然なり。臨終に聖衆、華を持して現ず。身心踊躍して金蓮に坐す。坐する時すなわち無生忍を得。一念に迎将して仏前に至る。法侶、衣を将て競い来って著せしむ。不退を証得して、三賢に入る。

私に云く、「少善根福徳の因縁を以て、彼の国に生ずることを得べからず」とは、諸余の雑行は、彼の国に生じ難し。故に随縁の雑善は、恐らくは生じ難しと云う。少善根とは、多善根に対する言なり。然ればすなわち雑善はこれ少善根なり。念仏はこれ多善根なり。故に『龍舒の浄土文』に云く、「襄陽の石に刻む『阿弥陀経』は、すなわち隋の陳仁稜が書ける所、字画清婉にして人多く慕玩す。一心不乱より下に、専ら名号を持すれば、名を称するを以ての故に諸罪消

滅す。すなわちこれ多善根福徳の因縁なりと云えり。今世に伝える本、この二十一字を脱す」。已上

ただ多少の義有るのみに非ず。また大小の義有り。謂く雑善はこれ小善根なり。念仏はこれ大善根なり。また勝劣の義有り。謂く雑善はこれ劣善根なり。念仏はこれ勝善根なり。その義まさに知るべし。

〔第十四　六方諸仏ただ念仏を証誠したまう篇〕

六方恒沙の諸仏余行を証誠せず、ただ念仏を証誠したまうの文。

善導の『観念法門』に云く、また『弥陀経』に云うがごとき、六方に各〳〵恒河沙等の諸仏有して、皆舌を舒べて遍く三千世界に覆って、誠実の言を説きたまう。もしは仏の在世、もしは仏の滅後の一切造罪の凡夫、ただ回心して阿弥陀仏を念じて、浄土に生ぜんと願ずれば、上百年を尽し、下七日一日十声三声一声等に至るまで、命終らんと欲する時、仏聖衆とともに、自ら来って迎接し、すなわち往生を得せしむ。

上のごときの六方等の仏の舒舌は、定んで凡夫の為に証を作し、罪滅して生ずることを得せしむ。もしこの証に依って生ずることを得ざれば、六方諸仏の舒舌、一たび口を出でて已後、ついに口に還り入らずして、自然に壊爛せんとなり。

同じく『往生礼讃』に『阿弥陀経』を引いて云く、東方に恒河沙のごとき等の諸仏、南西北方および上下一一の方に恒河沙のごとき等の諸仏、各〳〵本国において、その舌相を出して、遍く三千大千世界に覆って、誠実の言を説きたまう。汝等衆生皆まさにこの一切諸仏所護念経を信ずべし。云何が護念と名づく。もし衆生有って、阿弥陀仏を称念すること、もしは七日および一日、下十声乃至一声一念等に至るまで必ず往生を得。この事を証誠す。故に『護念経』と名づく。

また云く、六方の如来、舌を舒べて証す。専ら名号を称すれば、西方に至る。かしこに到って華開いて妙法を聞けば、十地の願行自然に彰わる。

同じく『観経の疏』に『阿弥陀経』を引いて云く、また十方の仏等、衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざらんことを恐畏して、すなわちともに同心同時に、各〳〵舌相を出して、遍く三千世界に覆って、誠実の言を説きたまう。汝等衆生、皆まさにこの釈迦の所説・所讃・所証を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近を問わず、ただ能く上百年を尽し、下一日七日に至るまで、一心に専ら弥陀の名号を念ずれば、

定んで往生を得、必ず疑い無しと。

同じく『法事讃』に云く、心心念仏して疑いを生ずること莫れ。六方の如来、不虚を証す。三業専心にして雑乱無ければ、百宝の蓮華、時に応じて見わる。

法照禅師の『浄土五会法事讃』に云く万行の中に急要たり迅速なること、浄土門に過ぎたるは無し。ただ本師金口の説のみにあらず。十方の諸仏、ともに伝証す。

私に問うて曰く、何が故ぞ六方の諸仏の証誠、ただ念仏の一行に局るや。答えて曰く、もし善導の意に依れば、念仏はこれ弥陀の本願なり。故にこれを証誠す。余行は爾らず、故にこれ無し。

問うて曰く、もし本願に依って念仏を証誠せば、『双巻』、『観経』等に念仏を説く時、何ぞ証誠せざるや。答えて曰く、解するに二義有り。一に解して云く、『双巻』、『観経』等の中に、本願念仏を説くといえども、兼ねて余行を明す。故に証誠せず。この『経』の中には一向に純ら念仏を説く。故にこれを証誠す。二に解して云く、彼の『双巻』等の中に、証誠の言無しといえども、この『経』すでに証誠有り。これに例して彼れを思うに、彼等の『経』の中において説く所の念仏、またまさに証誠の義有るべし。文はこの『経』に在りといえども、義は

彼の『経』に通ず。故に天台の『十疑論』に云く、「また『阿弥陀経』・『大無量寿経』・『鼓音声 陀羅尼経』等に云わく、釈迦仏、この経を説きたまう時に、皆十方世界に各〳〵恒沙諸仏の有して、その舌相を舒べて、遍く三千世界に覆って、一切衆生、阿弥陀仏を念ずれば、仏の大悲本願力に乗ずるが故に、決定して極楽世界に生ずることを得と証 誠す」。

〔第十五　六方諸仏護念篇〕

六方の諸仏念仏の行者を護念したまうの文。

『観念法門』に云く、また『弥陀経』に説くがごとき、もし男子女人有って、七日七夜および一生を尽して、一心に専ら阿弥陀仏を念じて往生を願ずれば、この人常に六方恒河沙等の仏、ともに来って護念したまうことを得るが故に『護念経』と名づく。『護念経』という意は、また諸悪鬼神をして便を得せしめず。また横病 横死、横に厄難有ること無く、一切の災障、自然に消 散す。不至心を除く。

『往生礼讃』に云く、もし仏を称して往生する者は、常に六方恒河沙等の諸仏の為に護念せらるるが故に『護念経』と名づく。今すでにこの増上の誓願の憑むべき有り。諸〳〵の仏子等、何ぞ意を励まして去らざるや。

私に問うて曰く、ただ六方の如来のみ有って、行者を護念するや如何。答えて曰く、六方の如来に限らず、弥陀、観音等、また来って護念したまう。故に『往生礼讃』に云く、「『十往生経』に云く、もし衆生有って、阿弥陀仏を念じて往生を願ずれば、彼の仏すなわち二十五の菩薩を遣して、行者を擁護せしむ。もしは行、もしは坐、もしは住、もしは臥、もしは昼、もしは夜、一切の時、一切の処に、悪鬼悪神をしてその便を得せしめず。また『観経』に云うがごとき、もし阿弥陀仏を称礼念じて彼の国に往生せんと願ずれば、彼の仏すなわち無数の化仏、無数の化観音勢至菩薩を遣して、行者を護念す。また前の二十五の菩薩等とともに、百重千重に行者を圍繞して、行住坐臥、一切の時処を問わず、もしは昼、もしは夜、常に行者を離れたまわず。今すでにこの勝益の憑むべき有り。願わくは諸〳〵の行者、各〳〵すべからく至心に往くことを求むべし」。また『観念法門』に云く、「また『観経』の下の文のごとき、もし人有って、至心に常

に阿弥陀仏および二菩薩を念ずれば、観音勢至、常に行人の与に勝友知識と作って随逐影護す」。また云く、「また『般舟三昧経』の行品の中に説いて云うがごとく、仏の言わく、もし人専らこの念弥陀仏三昧を行ずれば、常に一切の諸天および四天大王、龍神八部、随逐影護し、愛楽相見することを得て、永く諸〻の悪鬼神・災障厄難、横に悩乱を加えること無し。つぶさには護持品の中に説くがごとし」。また云く、「三昧の道場に入るを除いて、日別に弥陀仏を念ずること一万して、畢命相続する者は、すなわち弥陀の加念を蒙り、罪障を除くことを得。また仏と聖衆と、常に来って護念したまうことを蒙る。すでに護念を蒙れば、すなわち延年転寿を得」。

〔第十六　弥陀の名号を以て舎利弗に付属したまう篇〕

釈迦如来弥陀の名号を以て慇懃に舎利弗等に付属したまうの文。

『阿弥陀経』に云わく、仏この『経』を説き已りたまうに、舎利弗および諸〻の比

丘、一切世間の天人阿修羅等、仏の所説を聞いて観喜信受し、礼を作して去りぬ。

善導の『法事讃』に、この文を釈して云く、世尊説法の時まさに了らんとす。慇懃に弥陀の名を付属したまう。五濁増の時、疑謗多く、道俗相い嫌って聞くことを用いず。修行すること有るを見ては、瞋毒を起し、方便破壊して競って怨を生ず。かくのごときの生盲闡提の輩、頓教を毀滅して永く沈淪せん。大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身を離れることを得べからず。大衆同心に、皆所有る破法罪の因縁を懺悔せよ。

私に云く、およそ三経の意を案ずるに、諸行の中に念仏を選択して以て旨帰と為す。まず『双巻経』の中に三の選択有り。一には選択本願、二には選択讃歎、三には選択留教なり。一に選択本願とは、念仏はこれ法蔵比丘、二百一十億の中において、選択したまう所の往生の行なり。細しき旨上に見えたり。故に選択本願と云う。二に選択讃歎とは、上の三輩の中に菩提心等の余行を挙ぐといえども、釈迦すなわち余行を讃歎せず、ただ念仏において、讃歎して無上功徳と云う。故に選択讃歎と云う。三に選択留教とは、また上に余行諸善を挙ぐといえども、釈迦選択して、ただ念仏の一法を留む。故に選択留教と云う。

次に『観経』の中にまた三の選択有り。一には選択摂取、二には選択化讃、三には選択付属なり。一に選択摂取とは、『観経』の中に定散の諸行を説くといえども、弥陀の光明ただ念仏の衆生を照して、摂取して捨てたまわず。故に選択摂取と云う。二に選択化讃とは、下品上生の人、聞経と称仏との二行有りといえども、弥陀の化仏、念仏を選択して、「汝、仏名を称するが故に諸罪消滅す、我れ来って汝を迎う」と云う。故に選択化讃と云う。三に選択付属とは、また定散の諸行を明すといえども、ただ独り念仏の一行を付属す。故に選択付属と云う。

次に『阿弥陀経』の中に一の選択有り。いわゆる選択証誠なり。すでに諸経の中において、多く往生の諸行を説くといえども、六方の諸仏、彼の諸行において証誠せず。この『経』の中に念仏往生を説きたまうに至って、六方恒沙の諸仏、各〳〵舌を舒べて大千に覆い、誠実の語を説いてこれを証誠したまう。故に選択証誠と云う。加之、『般舟三昧経』の中に、また一の選択有り。いわゆる選択我名なり。弥陀自ら説いて言わく、「我が国に来生せんと欲する者は、常に我が名を念じて休息せしむること莫れ」と。故に選択我名と云う。本願と摂取と我名と化讃と、この四はこれ弥陀の選択なり。讃歎と留教と付属と、この三は

これ釈迦の選択なり。証誠は六方恒沙諸仏の選択なり。然ればすなわち、釈迦、弥陀および十方の各〳〵恒沙等の諸仏、同心に念仏の一行を選択したまう。余行は爾らず。故に知んぬ。三経ともに念仏を選んで、以て宗致とするのみ。計れば、それ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には、且く聖道門を閣いて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正雑二行の中には、且く諸〳〵の雑行を抛って、選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲せば、正助二業の中には、なお助業を傍にし、選んで正定を専らにすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏名を称するなり。名を称すれば、必ず生ずることを得。仏の本願に依るが故なり。

問うて曰く、華厳・天台・真言・禅門・三論・法相の諸師、各〳〵浄土法門の章疏を造る。何ぞ彼等の師に依らずして、ただ善導一師を用いるや。答えて曰く、彼等の諸師、各〳〵皆浄土の章疏を造るといえども、しかも浄土を以て宗と為さず。ただ聖道を以てその宗と為す。故に彼等の諸師に依らざるなり。善導和尚は偏に浄土を以て宗と為て、しかも聖道を以て宗と為ず。故に偏に善導一師に依るなり。問うて曰く、浄土の祖師その数また多し。謂く弘法寺の迦才・慈愍三蔵等これなり。何ぞ彼等の諸師に依らずして、ただ善導一師を用いるや。答えて曰

く、これ等の諸師、浄土を宗とすといえども、いまだ三昧を発さず。善導和尚はこれ三昧発得の人なり。道においてすでにその証有り。故に且くこれを用う。

問うて曰く、もし三昧発得に依らば懐感禅師もまたこれ三昧発得の人なり。何ぞこれを用いざる。答えて曰く、善導はこれ師なり。懐感はこれ弟子なり。故に師に依って弟子に依らず。いわんや師資の釈その相違はなはだ多し。故にこれを用いず。

問うて曰く、もし師に依って弟子に依らずんば、道綽禅師はこれ善導和尚の師なり。そもそもまた浄土の祖師なり。何ぞこれを用いざる。答えて曰く、道綽禅師はこれ師なりといえども、いまだ三昧を発さず。故に自ら往生の得否を知らず。「善導に問うて曰く、道綽念仏す往生を得んや否や。導、一茎の蓮花を弁じてこれを仏前に置かしめ、行道七日せんに花萎悴せずんば、すなわち往生を得んと。これに依って七日するに、果然として花萎黄せず。綽、その深詣を歎ず。入定して、生ずることを得べきや否やを観ぜんことを請うに因って、導、すなわち定に入って、須臾に報じて曰く、師まさに三罪を懺すべし。まさに往生すべし。一には師、かつて仏の尊像を安じて檐牖の下に在き、自らは深房に処る。二には出家の人を駆使策役す。三には屋宇を営造して蟲命を損傷す。師、宜しく十方

仏の前において第一の罪を懺じ、四方僧の前において第二の罪を懺じ、一切衆生の前において第三の罪を懺ずべし。綽公、静に往咎を思うに、皆曰うこと虚しからず。ここにおいて心を洗って悔謝し訖って導に見ゆ。すなわち曰く、師の罪滅しぬ。後まさに白光有って照燭すべし。これ師の往生の相なり」。已上『新修往生伝』。

ここに知んぬ。善導和尚は行、三昧を発して、力、師位に堪えたり。解行、凡に非ざること、まさにこれ暁けし。いわんやまた時の人の諺に曰く、「仏法東行より已来、いまだ禅師のごとき盛徳有らず」。絶倫の誉、得て称すべからざる者か。加之、『観経』の文疏を條録するの刻、すこぶる霊瑞を感じ、しばしば聖化に預れり。すでに聖の冥加を蒙って、しかも『経』の科文を造る。世を挙げて証定の疏と称し、人これを貴ぶこと、仏の経法のごとし。すなわち彼の『疏』の第四巻の奥に云く、「敬って一切有縁の知識等に白す。余はすでにこれ生死の凡夫、智慧浅短なり。然るに仏教幽微なれば、あえて輙すく異解を生ぜず。ついにすなわち心を標し願を結んで霊験を請求して、まさに心を造すべし。南無帰命、尽虚空遍法界の一切の三宝、釈迦牟尼仏、阿弥陀仏、観音勢至、彼の土の諸菩薩大海衆および一切の荘厳相等、某今この『観経』の要義を出して、古今を楷定せんと欲す。もし三世の諸仏、釈迦仏、阿弥陀仏等の大悲の願意に称わば、

願わくば夢の中において、上の所願の如きの一切の境界諸相を見ることを得んと。仏像の前において願を結し已って、日別に『阿弥陀経』を誦すること三遍、阿弥陀仏を念ずること三万遍、至心に発願す。すなわち当夜において見らく、西方の空中に、上のごときの諸相の境界ことごとく皆顕現す。雑色の宝山、百重千重、種種の光明、下、地を照して、地、金色のごとし。中に諸仏菩薩有り。あるいは坐し、あるいは立し、あるいは語し、あるいは黙し、あるいは身手を動かし、あるいは住して動ぜざる者有り。すでにこの相を見て、合掌立観す。ややく久しくしてすなわち覚む。覚め已って欣喜に勝えず。ここにすなわち義門を條録す。これより已後、毎夜夢中に常に一僧有って、来って玄義科文を指授す。すでに了りぬれば、更にまた見えず。後時脱本し竟已って、また更に至心に七日を要期して、日別に『阿弥陀経』を誦すること十遍、阿弥陀仏を念ずること三万遍、初夜、後夜に、彼の仏の国土の荘厳等の相を観想し、誠心に帰命すること、一ら上の法のごとくす。当夜にすなわち三具の磑輪道の辺に独り転ずるを見る。たちまち一人の白き駱駝に乗ずる有り。来り前んで師に勧め見る。まさに努力めて決定往生すべし。退転を作すこと莫れ。この界は穢悪にして苦多し、貪楽を労せざれと。答えて言く、大いに賢者好心の視誨を蒙る。某し畢命を期と為て、あえ

て懈慢の心を生ぜずと。云云第二の夜に見らく、阿弥陀仏の身、真金色にして、七宝樹の下、金蓮華の上に在して坐したまう。十僧圍遶して、また各一の宝樹の下に坐せり。仏樹の上に、すなわち天衣有って挂り遶れり。面を正し西に向って、合掌して坐して観る。第三の夜に見らく、両の幢杆、極めて大いに高く顕れ、幡懸って五色なり。道路縦横にして、人観るに礙り無し。すでにこの相を得已って、すなわち休止して七日に至らず。上来所有の霊相は、本心、物の為にして已身の為にせず。すでにこの相を蒙れり。あえて隠蔵せず。謹みて以て義の後に申呈して、聞を末代に被むらしむ。願わくば含霊、これを聞いて信を生じ、有識の覩る者をして、西に帰せしめんことを。この功徳を以て衆生に回施す。ことごとく菩提心を発して、慈心をもって相い向い、仏眼をもって相い看て菩提まで眷属し、真の善知識と作って、同じく浄国に帰してともに仏道を成ぜん。この義すでに証を請うて定め竟んぬ。一句一字、加減すべからず。写さんと欲する者は、一ら経法のごとくせよ。まさに知るべし」。已上

静に以れば、善導の『観経の疏』は、これ西方の指南、行者の目足なり。然ればすなわち、西方の行人、必ずすべからく珍敬すべし。中に就いて毎夜夢中に僧有って玄義を指授す。僧は恐らくはこれ弥陀の応現ならん。爾らば謂うべし。

この『疏』はこれ弥陀の伝説なりと。何にいわんや、大唐に相い伝えて云く、「善導はこれ弥陀の化身なり」と。爾らば謂うべし。またこの文はこれ弥陀の直説なりと。すでに写さんと欲する者は、一ら経 法のごとくせよと云えり。この言は誠なるかな。仰いで本地を討ぬれば、四十八願の法王なり。十劫正覚の唱え、念仏に憑有り。俯して垂迹を訪えば、専修念仏の導師なり。三昧正受の語は、往生に疑い無し。本迹 異なりといえども、化導これ一なり。ここにおいて貧道、昔この典を披閲してほぼ素意を識り、立ちどころに余行を舎てて、ここに念仏に帰す。それより已来、今日に至るまで、自行 化他ただ念仏を綽とす。然る間、希に津を問う者には、示すに西方の通津を以てし、たまたま行を尋ぬる者には、誨えるに念仏の別行を以てす。これを信ずる者は多く、信ぜざる者は尠し。まさに知るべし。浄土の教、時機を叩いて行 運に当り、念仏の行、水月を感じて昇降を得たり。而るに今図らざるに仰を蒙る。辞謝するに地無し。仍って今愁に念仏の要文を集め、剰え念仏の要義を述ぶ。ただ命 旨を顧みて不敏を顧みず。これすなわち無慚無愧のはなはだしきなり。庶幾わくは一たび高覧を経てのち、壁底に埋めて窓前に遣すこと莫れ。恐くは破法の人をして、悪道に堕せしめんことを。

選択本願念仏集（せんちやくほんがんねんぶつしゆう）